

年報

第28号
(令和6年度)

教化推進レポート

- 1.現代仏教に期待されることー林住期の高年齢者を取り込めるか？
- 2.AIテクノロジーと教化活動
- 3.「教化を考える会」ならびに「他宗派・他団体との交流会」開催報告

智山教化センター

I 緒言	1
II 令和6年度教化目標の推進	4
A. 研修・講習会の開催	4
B. 教区等の活動について	10
C. 各種講習会等の出講について	13
D. 出版物と教化推進	14
III 教化推進レポート	16
■1 現代仏教に期待されること ー林住期の高年齢者を取り込めるか？	16
■2 AIテクノロジーと教化活動	25
■3 「教化を考える会」ならびに 「他宗派・他団体との交流会」開催報告	33
IV その他	40
・購入図書 宗内寺院・教会刊行物 寄贈図書・資料	40
・智山教化センターの役割と活動／智山教化センター構成員	裏表紙

I 緒言

智山教化センター センター長 高岡邦祐

家族形態が変わりゆくなかで

少子化が進む日本社会の問題をいち早く指摘し、家族を取り巻く現状を長年にわたり研究され、「パラサイト・シングル」「婚活」「格差社会」といった言葉を浸透させた社会学者の山田昌弘先生は、著書『「家族」難民：生涯未婚率25% 社会の衝撃』（朝日新聞出版/2014年）のなかで「4分の1が結婚せず、4割が子どもをもたない社会。家族を単位としたあらゆる制度が崩壊、見直しを迫られる」と日本社会の未来に警鐘を鳴らしました。

それから10年後の現代社会では、個人化がさらに進み、世帯の縮小化（単独世帯の割合が全体の4割と急速に増え）や家族機能の弱体化（経済的、精神的に支え合うことが難しい状況）が広がっています。また、伝統的な家族の規範や文化を継承することの意義も見失われつつあり、寺院においては「檀家や墓地を代々受け継ぐ」ことが、難しい状況が生まれています。

かつて新興宗教が勢力を拡大した時代に、「うちは（お寺は）墓質をとっているから大丈夫」と発言した僧侶がいたそうですが、現代では墓地の継承が人々の悩み事のひとつとなり、改葬や「墓じまい」とともに離檀する人も増え、代々の家墓があることが単純に安心ではなくなりつつあります。

筆者は、各宗派の僧侶で組織する「仏教情報センター」で平成20年10月1日から令和3年3月31日まで、テレホン相談員を務めさせていただきましたが、1日の電話相談のなかで、必ず墓地の改葬や「墓じまい」の相談があり、寺院と直接相談しにくい事柄として相談の上位にあがっており、「法外な離檀料を請求され

て、困っている」という訴えもあるなか、「継承したいが、子どもに迷惑をかけたくない」という声が多々聞かれました。

檀家＝家の宗教が生み出す距離感

本宗の総合調査においても、「過去5年間の檀家の増減」の問いに対し、平成22年度総合調査で「減少した」が「増加した」を上回って以来、「減少した」と答える寺院が、平成22年度総合調査では25.7%であったのが令和3年度総合調査では58.8%と倍増し、「減少した」理由として「後継者が絶えたため」が増加し続けています。

この先も日本は人口減少、人口移動による過疎化が進むため、檀家減少の傾向は変わらないことが予想されます。しかし、ここで一度、立ち止まって考えておくべきことがあります。この場合の減少した檀家というのは、「家を継ぐ者」であり「家墓を継承する者」にほぼ限定されている点です。これは寺院・僧侶にとってあまりにも当たり前のことで、何を立ち止まって考えるのか疑問に思われるかもしれません。

もちろん、家の宗教を否定したいわけでもなく、家の宗教として檀家、墓地を継承していきたいと思う人は、今後も一定の割合で存在していくと思われます。しかし、日本人の意識が家から家族へ、ひとつの理想のモデルや役割を共有する家族から個人として集う家族へと変わっていくなかで、私たち寺院・僧侶側が檀徒を家単位だけでとらえていくことで、見落としてしまうことはないだろうかと思うのです。

檀家制度と家意識の変遷

ここで今一度、檀家制度と家制度の関係の歴史を振り返ってみたいと思います。檀家制度（寺請制度）は寛永年間に江戸幕府が、すべての民衆はいずれかの寺院を菩提寺と定め、その檀家となることを義務付けたことに始まります。それに伴って、現在の戸籍に当たる宗門人別帳が作成され、旅行や住居の移動の際にはその証文（寺請証文）が必要とされました。江戸時代は職業選択の自由がほぼなく、人の移動も制限されていたので、家の職業が先祖代々継承され、家意識が高まっています。

明治31年（1898）に制定された家制度は、戸主（こしゅ）とその家族で一つの家を構成させ、家ごとに戸籍をつくり、戸主が家族を統率する仕組みです。戸主に結婚、財産、相続など家の統率権限を与え、戸主の家を存続させることを重視させました。その結果、家意識が強固になり、先祖祭祀や家墓への関心が深まり、檀家と寺院の結びつきがさらに強固になりました。

戦後、日本国憲法が公布（1946年）された翌年に民法が改正され、夫婦には同等の権利・義務があると定められ、結婚や財産や相続に関する制度が変わり、「男女平等」と「個人の尊重」が位置づけられました。民法改正で家制度は廃止されましたが、60年代以降、日本は高度経済成長により経済力が高まり、一億総中流といわれ、家族を中心に豊かな暮らしを追求してきたことで、寺院はお葬式などを中心に家の宗教として関わり続け、檀家制度の維持がはかられました。

私たち寺院・僧侶は、こうした歴史のなかで、家を中心に檀徒と関わりを深めてきました。しかし、今日の葬送の変化や家墓の継承問題をみても、檀徒の意識は家から家族、そして個人へと変わりつつあるように思います。僧侶と檀徒で家に対する意識のズレが広がれば、寺檀関係のミスリードが起こるでしょう。

永代供養墓は誰のために

民法が改正されて、家制度がなくなっても、檀家制度が維持された大きな理由は、寺院・僧侶が先祖や故人の供養を行い、現世利益を祈って、檀信徒の気持ちに寄り添い、檀家は家族同然と思って接してきたからに違いありません。今後、私たちが、寺檀関係のなかで大切にすべき視点は、家のなかで暮らす家族、家族としての個人ひとり一人の思いではないでしょうか。家という単位にとらわれ過ぎると、この視点を見失ってしまう気がします。

昨今、継承を前提としない墓地として永代供養墓を建立する寺院が増えています。家族が墓を継承していくことが困難な時代が来ることを見越して、平成元年に永代供養墓を開設し、全国の永代供養墓の先駆け的存在となった日蓮宗妙光寺（新潟県新潟市）の小川英爾師は「家族や家が支えてきた問題をお寺が担うのだという覚悟がなく、永代供養墓を提供するだけでは、もはや人々にとって魅力にならない」と断言します。そして「永代供養墓は出口ではなく入口」と語り、永代供養墓の会員に対し、寺報の送付をはじめ、さまざまな行事や教化活動への参加を呼びかけ、若い世代も含めて会員ひとり一人との交流を心がけて活動されています。

家に対する意識が変わり、家族形態が変化しようとも、亡き人を供養したい、大切な人の幸せを祈りたいという気持ちはおそらく変わらないでしょう。問題は供養してもらいたい、祈ってもらいたいが、どうすればよいかと悩んでいる人に、どのように手を差し伸べていくかです。これまでの家単位に留まらず、家族のひとり一人に関わっていく方法を模索していかなければなりません。「永代供養墓」などの新しい墓地の建立をそのきっかけにしていきたいものです。

ご本尊さまのお力をいただくために

私たち僧侶は、「死者供養」と「現世利益」

を求める檀信徒の気持ちに寄り添いながら、「回向」と「祈願」を行ってきました。それは、今後も変わらず寺院活動の中心となることでしょう。しかし、これからは「回向」や「祈願」の場面が、先祖代々や〇〇家の祈り、自身や家族への祈りに留まらず、ご本尊さまへの祈りと結びついていることを感じていただくことが大切です。如来の神変加持の力を強調する真言宗としては、ご本尊さまの加持力をいただいている、ご本尊さまに見守られていることを実感してもらうことが、檀信徒自身の安心に結びついていきます。

慶應義塾大学教授で『お寺の行動経済学』の著者の中島隆信先生は、「何かちょっと不安に思う」「気持ちを新たにしたい」「自分の願いを叶えたい」などの内的動機を転換させて信心へと導いていくことが、教化者の力量が問われるところだといわれました。そのためには、檀信徒にむけて、行事や法要や教化活動のさまざまな場面でご本尊さまと向き合う場面をつくり、ご本尊さまのお力を感じていただく作法として洒水加持や、ご本尊さまとご縁を結ぶ「お授け」の機会を設け、普段からご本尊さまの御誓願や御利益を説いていくことが大切ではないかと思います。

推奨する教化活動でご本尊を中心としたコミュニティづくり

本宗では推奨する教化活動として「智山勤行式・十善戒」「お仏壇」「青少幼年教化」「写経・写仏」「御詠歌」「団参・巡礼・遍路」「阿字観」「結縁灌頂・発心式」を取り上げ、その実践を呼びかけています。これらの教化活動は、ご本尊さまのご利益を伝え、檀信徒の信仰心を涵養する絶好の機会となります。「回向」や「祈願」をきっかけに、推奨する教化活動に参加する檀信徒は少なくありません。また、推奨する教化活動の多くは、檀信徒以外の一般の方でも参加することができ、檀信徒の枠を広げていくことができます。このことはご本尊さまを中心にした檀信徒のコミュ

ニティづくりにも結びついてくるでしょう。寺院が置かれている状況はさまざまで、教化活動に力を注ぐことが難しい状況もあると思いますが、寺庭、寺族の協力のもと、工夫を加えながら、推奨する教化活動の一つでも取り組んでいただければと思います。

地域コミュニティの再生と個人のウェルビーイング

従来、寺院の多くは地域社会の中心として、祭事や催しなど多様な活動をとおして、地域コミュニティの活性化の役割を担ってきました。地域のコミュニティは人々のつながりのなかで感じる幸せを提供してきました。しかし、世帯の縮小化や人口減少の波が押し寄せる地域では、地域コミュニティが衰退し、個人が孤立していき、さまざまな問題（子どもの貧困、ヤングケアラー、ひとり暮らしの高齢者の支援、孤独死など）が生まれています。寺院が単独でこれらの問題を解決することは難しく、こうした地域の課題に目を向けることをあきらめてしまうかもしれません。しかし、寺院・僧侶が「家族の絆を深めるためには何ができるのか」「地域コミュニティを豊かにするために何ができるのか」「個人のウェルビーイング（こころの健康、社会的つながり、経済的な安定等による全体的幸福感）にどう関わっていけるのか」という問いを立て続けることで、地域や家族の問題と向き合うあらたなアイデアが生まれ、それらを檀信徒をはじめ地域の人々と共有していくことで、地域コミュニティの再生につながっていく可能性があると思われます。智山教化センターはこうした活動の先駆的な取り組みについても情報収集し、発信していきたいと考えています。

本『年報』は、令和6年度に智山教化センターが関わり活動してきたすべての内容を報告し、教化のための知見を広げていただくためにご提示するものです。

II

令和6年度教化目標の推進

生きる力

— 仏さまに祈り、仏さまと出会う

A. 研修・講習会の開催

II

令和6年度教化目標の推進

1

教師・寺族向けの研修会

智山総合研修会

本宗教師・寺庭婦人のさまざまな研鑽意欲に応えるために宗務庁が主催する分科会形式の研修会。教化センターでは第1分科会の企画・運営を担当した。

日 時：令和6年5月30日(木)～5月31日(金)

会 場：別院真福寺

教化目標説明：高岡邦祐 智山教化センター長

第1分科会「マインドフルネスとコンパッションの心理学」～自利と利他の一考察～

本講義では、瞑想をとおして呼吸から自分自身を知り、感情や身体的感覚を把握することができるといふ趣旨のもと、マインドフルネスによりダルマ(無常無我苦)を理解し、コンパッション(慈悲)を抱くことができることが示された。本分科会で取り上げた慈悲の瞑想は、自他問わず慈悲的行動のプライミングとして医療教育にも取り入れられている。その実践の一例としてドライフルーツのレーズンを用いた瞑想を行った。この効果として普段気づかない身体感覚や感情を把握することができ、身体的感覚から慈悲を抱くことができるようになる。これにより、いつでも慈悲を抱くことが可能となる。この効果は、繰り返すことでより高まっていくことが判明しており、瞑想に加えて慈悲的なイメージを抱き、慈悲的な言葉を発することで、自身にも他者にも慈悲を向けられるようになっていくのだと締めくくられた。



— 藤野正寛 氏 —

講 師：藤野正寛 氏 (NTTコミュニケーション科学基礎
研究所 リサーチスペシャリスト)

司 会：島 玄隆 智山教化センター所員

記 録：原 厳汰 智山教化センター所員



— レーズンを用いた瞑想 —

報告：『宗報』887号(令和6年8月号)掲載

寺子屋勉強会

本研修会は、これから寺子屋を始めようとしている方とすでに寺子屋を実践している方の両方を対象とし、企画から開催、そして更なる内容の充実を目指し、寺子屋活動に関する情報を網羅した内容で開催している。令和6年度は下記の内容で開催された。

- 日 時：令和6年5月22日(水)
- 会 場：別院真福寺・オンライン
- 内 容：講義「安全対策、企画・広報について」
アイスブレイクゲーム「三人寄れば文殊の知恵」
寺子屋開催事例報告(3ヶ寺)
ワークショップ①
「自坊写真を使用した神経衰弱ゲーム体験」
ワークショップ②
「お大師さまカルタすごろく体験」
全体会
- 講 師：本郷幸枝 氏(宮城教区 観音院中寺庭)
平野明宏 師(安房第一教区 大福寺中)
鈴木照隆 師(成田山 東京別院 深川不動堂)
佐藤順興 師(埼玉第二教区 閻魔寺)
池田裕憲 智山教化センター所員
原 巖汰 智山教化センター所員
- 参 加 者：22名(会場16名 オンライン6名)



アイスブレイクゲーム
「三人寄れば文殊の知恵」



ワークショップ①「自坊写真を使用した神経衰弱ゲーム体験」



ワークショップ②
「お大師さまカルタすごろく体験」

報告：『宗報』887号(令和6年8月号)掲載

教化活動実践セミナー **中止**

教化活動は、その意義や方法を聞いただけでは理解できないため、体験学習を主体とした研修形式として実修に主眼を置き、教化者の育成を目指している。本セミナーは教化活動の具体的場面を想定し、その状況にあわせた実践研修をおこなうことにより、体験的に学ぶことを目的としている。令和6年度の実践セミナーは、推奨する教化活動の中から「遍路」を取りあげ、次のプログラムにて企画された。※参加申し込みが最少催行人数に満たなかったため、中止となった。

- 日 時：令和7年2月4日(火)～2月6日(木)
- 会 場：高知県内四国八十八カ所霊場(智山派5カ寺、豊山派3カ寺、御厨人窟)
- テ マ：お遍路「お大師さまを観じて一高知智山派霊場寺院を巡る旅一」
- 内容・講師：研修①「歩き遍路体験」(竹林寺) 海老塚和秀 師(高知教区 竹林寺)
研修②「御詠歌練習と魅力」
長谷川理賢 智山教化センター所員・密厳流遍照講指導師範
研修③「先達のお話」 山崎英夫 氏(八十八箇所霊場公認大先達)
研修④「遍路企画方法Q&A」 大久保知佐 氏(とさでん交通株式会社バスガイド)
研修⑤全体会

2

教師・寺族と檀信徒がともに参加できる研修会

愛宕薬師フォーラム

教師・寺族・檀信徒・一般の方々の知的好奇心に応えるため、仏教、さらには現代社会が抱える問題や社会現象などのさまざまなテーマで講演会を開催している。令和6年度は2回開催した。

毎回、別院真福寺を会場に各界の専門家による講演が行われ、参加者のより深い理解を促すべく、講演後には質疑応答の時間を設けている。

■第45回 令和6年9月9日(月)

テーマ：「密教とヒンドゥー教 ―聖天・弁才天・吉祥天・大黒天・帝釈天・阿修羅の元の姿とは―」

会場：別院真福寺・オンライン

講師：山田真美氏(作家／インド工科大学客員准教授)

司会：上村正健 智山教化センター所員

参加者：85名(対面56名、オンライン29名)



―山田真美氏―

報告：『宗報』891号(令和6年12月号)掲載

■第46回 令和7年3月13日(木)

テーマ：「紙とともに去りぬ ―怒り、煩惱との向き合い方―」

会場：別院真福寺・オンライン

講師：川合伸幸氏(名古屋大学教授)

司会：島 玄隆 智山教化センター所員

参加者：55名(対面33名、オンライン22名)



―川合伸幸氏―

報告：『宗報』896号(令和7年5月号)掲載予定

3

檀信徒向けの研修会

檀信徒研修会(教化部企画運営協力)

全国の檀信徒が、信仰を深め、日々安らぎに満ちた生活を送っていただくことを目的として総本山智積院に集い、さまざまな宗教体験(写経、阿字観など)を実修するために開催している。

令和6年度は宗祖弘法大師ご誕生1250年を慶祝し、さまざまなプログラムをとおして、お大師さまの生涯や教えについて学ぶ企画とした。(令和4年度から同内容)

日時：令和6年11月13日(水)～11月14日(木)

会場：総本山智積院

テーマ：「お大師さまご誕生1250年を迎えて

～お大師さまのご誕生とみ教えを学び、真言宗の修行を体験する～」

参加者：39名

内容・講師：法話①「真言宗の教え、お勤め」

小杉秀文 智山教化センター専門員

修行体験①「写経」

船岡芳海 智山教化センター所員

修行体験②「阿字観」

原 巖汰 智山教化センター所員

修行体験③「オリジナル御朱印帳作り」

長谷川理賢 智山教化センター所員

法話②「お大師さまのご生涯と教え」お大師さまカルタ

池田裕憲 智山教化センター所員

修行体験④「諸堂巡礼」

1班 山田健真 教師講習所教化専門科生、原 巖汰 智山教化センター所員

2班 毛利芳己 教師講習所教化専門科生、長谷川理賢 智山教化センター所員

3班 久志卓豊 教師講習所教化専門科生、小杉秀文 智山教化センター専門員

4班 中島隆光 教師講習所教化専門科生、船岡芳海 智山教化センター所員

報告：『宗報』893号（令和7年2月号）掲載

4 教区教化研究会・檀信徒教化推進会議の開催推進のために

教区教化研究会・檀信徒教化推進会議 運営セミナー

日 時：令和7年3月14日（金）

会 場：別院真福寺・オンライン

テーマ：「檀信徒が参加したくなる檀信徒教化推進会議を
考える」

対 象：教区長

参 加 者：57教区58名

内容・講師：「教区教化研究会・檀信徒教化推進会議ガイダンス」

小鍋寛仁 教宣課長

「令和7年度の本宗の教化推進について」

高岡邦祐 智山教化センター長

「宗教で人を幸せにできるのか」

櫻井義秀 北海道大学大学院文学研究院特任教授、智山教化センター専門員

分散会「檀信徒が参加したくなる檀信徒教化推進会議を考える」

報告：『宗報』896号（令和7年6月号）掲載予定



— 櫻井専門員 —

第63回中央布教師会総会

中央布教師会では、各教区の布教師会会長が集い、年1回総会を開催している。令和6年度は以下の内容で開催され、その企画・運営に協力した。

日 時：令和6年4月24日（水）

会 場：別院真福寺

テ ー マ：「お大師さまと歩むことから始まる、仏さまとの出会い」

教化目標説明：高岡邦祐 智山教化センター長

解 説：「お大師さまと歩むことから始まる、仏さまとの出会い」

倉松隆嗣 智山教化センター所員

事例紹介：事例紹介① 福田亮雄 師（東京東部教区 成就院）

事例紹介② 渡邊章悟 師（東京南部教区 新照寺）

報告：『宗報』886号（令和6年7月号）掲載

第30回寺庭婦人連合会総会

寺庭婦人連合会は、各教区の寺庭婦人会長が集い、年1回総会を開催している。その企画・運営に協力した。

日 時：令和6年5月23日（木）

会 場：別院真福寺

テ ー マ：「推奨する教化活動を実践する～智山寺庭ハンドブックを利用して～」

内容・講師：推奨する教化活動を実践する～智山寺庭ハンドブックを利用して～

中嶋亮順 智山教化センター所員

参 加 者：43名

報告：『宗報』887号（令和6年8月号）掲載

伝法院開設講座

智山伝法院は本宗の研究機関として、教育の一端を担うべく開設講座を開催し、教師・寺庭婦人の学習の場を設けている。智山教化センターでは令和6年度に2講座を智山伝法院と共同企画した。

■寺院活性化論「寺院・教化活動の実践を学ぶ」

5月開講（全7回）

さまざまな分野で活躍されている講師を招き、寺院と檀信徒との関係性を強化するための取り組みや活動方法を学ぶ。寺院活性化事例の紹介や実修を行うことで具体例を知り、自坊での活動の手助けとなるような機会とした。



— 伊藤堯仙 師 —

報告：『宗報』888号（令和6年9月号）掲載

■阿字観会開設講座

9月開講(全3回)

推奨する教化活動の一つである阿字観を檀信徒に体験してもらうための阿字観会を、自坊などで開催できるようになることを目指し開講された。阿字観伝授、阿字観総論で理解を深めた後、実習を行った。さらに実際に阿字観会を開催している寺院による事例報告から開催のヒントを得られる講座とした。



— 黒川高德 師 —

真福寺阿字観会

真福寺で一般を対象に開催している阿字観会の開催・指導に協力した。

令和6年

開催日	指導担当	参加人数
4月16日(火)	池田裕憲 智山教化センター所員	16名
5月28日(火)	原 厳汰 智山教化センター所員	13名
6月25日(火)	中嶋亮順 智山教化センター所員	20名
9月24日(火)	平野隆光 智山教化センター所員	27名
10月22日(火)	上村正健 智山教化センター所員	24名
11月28日(火)	松永祐翼 師(新潟第三教区 常泉寺)	20名

令和7年

開催日	指導担当	参加人数
2月18日(火)	船岡芳海 智山教化センター所員	19名
3月25日(火)	倉松隆嗣 智山教化センター所員	18名

B. 教区等の活動について

令和6年度 教区教化研究会 開催一覧

教 区	日 時	参加人数	講 師	テーマ
長野南部	4月19日	19名	近藤栄祐 師 長野南部 法船寺	口説布教について
栃木中央	4月26日	43名	島 玄隆 智山教化センター所員	宗派の本年度の教化推進について
京 阪	5月21日	34名	別所弘淳 師 伝法院非常勤講師 齋木淳子 氏 奈良国立博物館学芸部列品室長	日本仏教における空海と真言密教 弘法大師の請来品から見た密教伝法
埼玉第二	5月23日	38名	上村正健 智山教化センター所員	教化目標と御宝暦の解説
長野北部	5月24日	38名	高岡邦祐 智山教化センター長	寺院の活性化に向けて －人が集まるお寺づくりの実践方法－
新潟第三	6月5日	22名	倉松俊弘 師 栃木南部 薬王寺	生きる力 ～生命の神秘～
埼玉第五	6月8日	20名	中島隆信 氏 慶應義塾大学商学部教授	これからの教化を考える
上総第四	6月21日	19名	池田裕憲 智山教化センター所員	教化目標 令和6年度教化推進施策について 寺院の現状と課題を考察しこれからの教化活動を探る
埼玉七・八・九合同	6月29日	39名	薄井秀夫 氏 寺院デザイン代表	社会の転換期における葬送儀礼の現状と課題、寺院に求められること
安房第一	6月29日	22名	三神栄法 宗務総長 高岡邦祐 智山教化センター長	智山派の現状について (総本山智積院の動向および施政方針) 真言宗智山派の教化推進とこれからの檀信徒教化
北海道	7月2日	13名	伊佐栄豊 師 長野南部 延壽院	生きる力 －仏さまに祈り、仏さまと出会う 同行二人
岩 手	7月20日	17名	倉松隆嗣 智山教化センター所員	枕経における法話説明と実践について (教化を主として)
奥 羽	9月2日	14名	伊藤尚徳 智山教化センター所員	過疎化問題 「寺院消滅時代をどう生き抜くか」
埼玉第一	9月3日	11名	薄井秀夫 氏 寺院デザイン代表	お寺をめぐる何が起きているのか？ その傾向と対策
下総匠達	9月27日	10名	長谷川理賢 智山教化センター所員	教化目標についての講演並びに 「洒水加持とお授け」の実践
埼玉第十	10月14日	21名	鈴木正崇 氏 慶應義塾大学名誉教授	伝統と近代のはざままで －女人禁制をめぐる－
安房第二	11月4日	16名	島 玄隆 智山教化センター所員	仏事をわかりやすく伝えるための法話を学ぶ
新潟第三	11月5日	24名	鈴木晋雄 師 伝法院常勤研究員	曼荼羅について 仏教行事の作法について
福島第一	11月5日	27名	伊藤尚徳 智山教化センター所員	葬儀について ～意義を確認し、現代葬送事情を考える～
新潟第一	11月11日	15名	船岡芳海 智山教化センター所員	檀信徒が参加・体験する教化
新潟第二	11月11日	12名	島 玄隆 智山教化センター所員	法話に繋がる十三仏の話
佐 渡	11月16日	20名	平野隆光 智山教化センター所員	葬儀・法事のQ&A
神奈川	11月17日	16名	佐藤隆一 師 教化委員 河野洋一 氏 持田製薬株式会社顧問	現代社会における教化 現代社会における健康管理 －薬・サプリなどとの付き合い方－
下総印旛	11月26日	28名	石川照貴 師 智山講伝所所員	寺檀関係を再考する －寺請け制度から日本の伝統行事を見つめ直す－

教 区	日 時	参加人数	講 師	テーマ
福島第三	11月28日	7名	上村正健 智山教化センター所員	葬儀・諷誦文を中心に
福島第二	11月29日	7名	島 玄隆 智山教化センター所員	葬儀について 「現代葬送を考える」
安房第四	11月29日	15名	金本拓士 師 安房第四 真福寺	授戒の意義と檀信徒教化
茨城第一	12月4日	19名	腰塚勝也 師 埼玉第五 遍照院 長老	－檀信徒教化のための－ 「写仏」実習
東京西部	12月9日	10名	倉松俊弘 師 栃木南部 薬王寺	檀信徒の悲嘆に寄りそうために
栃木北部	12月16日	17名	長谷川理賢 智山教化センター所員	教化年次テーマの解説
埼玉第十一	2月10日	15名	花木義賢 師 東京北部 青蓮寺	参列者の心に響く通夜・葬儀 ～参列者参加型の通夜・葬儀の事例から学ぶ～
東京東部	2月10日	15名	高橋秀慧 師 大正大学非常勤講師	太平洋戦争と日本仏教界 －戦時下の真言宗と教化活動－
東京南部	2月25日	15名	飯島隆貴 師 東京西部 威徳寺中	もとめられる墓地の可能性
愛媛	2月28日	21名	上村正健 智山教化センター所員	教化目標と御宝暦の解説
北陸	3月7日	5名	貝谷隆慧 師 北陸 瀧谷寺	教化活動における光明真言

※「講師」の肩書きは開催当時のもの

令和6年度 檀信徒教化推進会議 開催一覧

教 区	日 時	参加人数	講 師	テーマ
東京多摩	5月28日	180名	天達武史 氏 気象防災キャスター	天気予報は健康予報 ～天気予報の上手な使い方教えます～ (健やかにストレスなく日々を過ごすヒント)
埼玉第十, 十一,十二合同	6月5日	149名	海老塚和秀 師 高知 竹林寺	生きる力 ～仏さまに祈り 仏さまと出会う～
安房第三	6月9日	86名	倉松隆嗣 智山教化センター所員	私たちの目標 「－仏さまに祈り、仏さまに出会う」の解説
東京北部	6月12日	70名	佐藤清隆 師 東京北部 長楽寺 一龍斎貞弥 氏 講談師	両祖大師ご誕生慶讃
栃木中央	6月21日	100名	三遊亭萬窓 氏 落語家	伝統話芸を聞く
安房第二	6月22日	60名	牧 宥恵 師 成田山葉牡丹布教師会会員	「写仏から学ぶ －心を豊かにする仏像・仏画の見方－」
佐渡	6月23日	96名	岡澤恭子 氏 長野北部 長谷寺 寺庭	絵解き 空海マンドラ
上総第一	6月27日	81名	上村正健 智山教化センター所員	智山御宝暦について
安房第一	6月30日	135名	荒井真道 教化部長 高岡邦祐 智山教化センター長	真言宗智山派の教えと総本山智積院について こころの杖ことば－南無大師遍照金剛－
福島第二	6月30日	48名	倉松隆嗣 智山教化センター所員	葬儀の意義について
新潟第一	7月2日	65名	岡澤恭子 氏 長野北部 長谷寺 寺庭	空海マンドラお大師さま一代記
新潟第二	7月3日	69名	岡澤恭子 氏 長野北部 長谷寺 寺庭	生きる力－仏さまに祈り、仏さまと出会う 絵解き「空海マンドラ」

教 区	日 時	参加人数	講 師	テーマ
新潟第三	7月3日	65名	池之上芳俊 師 新潟第三 眞福寺	御詠歌法音絵巻
栃木北部	7月10日	130名	上村正健 智山教化センター所員	寺院からの教化配布物に対して理解を深める 智山御宝暦の解説
下総匝瑳	9月27日	102名	長谷川理賢 智山教化センター所員 立川談幸 氏 落語家	教化目標についての認識と理解
安房第一	9月29日	99名	廣澤記子 氏 ヨーガ指導者 加藤有政 師 遍照講指導師範	仏さまに祈り、仏さまと出会う、そしてつながる ーヨーガと真言宗のおしえー 御詠歌入門編 概説および「密厳国土和讃」の実習
埼玉第一	10月8日	70名	高橋一晃 智山教化センター専門員	能登半島地震物故者慰霊法要 被災地復興護摩祈願会
山形庄内	10月14日	51名	伊藤尚徳 智山教化センター所員	南無大師遍照金剛 「お大師さまのご生涯とみ教えについて」
岩手	10月20日	147名	倉松隆嗣 智山教化センター所員	身近な修行 ～真言宗の座禅体験（阿字観）～
宮城	10月30日	110名	伊藤堯仙 師 智山講伝所非常勤所員	真言宗宗教儀式について
新潟第三	11月5日	63名	鈴木晋雄 師 伝法院常勤研究員	曼荼羅について 仏教行事と作法について
上総第三	11月5日	48名	鈴木晋怜 師 伝法院副院長	日本人の死生観について
長野北部	11月7日	54名	岡澤慶澄 師 長野北部長谷寺	総本山智積院参拝の旅 ～総本山智積院の歴史と現在～
長野南部	11月11日	112名	宮坂有峻 伝法院嘱託研究員 上村正健 智山教化センター所員	大般若について 智山御宝暦の解説
上総第四	11月11日	99名	石川隆教 師 安房第一 那古寺	智山勤行式を唱和し、仏様に祈り護摩修行を通じ 仏様と出会う
東京東部	11月20日	70名	小宮一雄 師 東京東部 東覺寺	宗祖弘法大師ご誕生一千二百五十年記念慶讃
下総海銚	11月28日	166名	原 厳汰 智山教化センター所員	お大師さまのご生涯
埼玉第二	11月28日	60名	高岡邦祐 智山教化センター長	葬儀の意義について
埼玉第四・五・六 合同	11月29日	310名	荒井真道 教化部長 三遊亭楽生 氏 落語家	生きる力 ー仏さまに祈り 仏さまと出会う
福島第三	11月29日	60名	上村正健 智山教化センター所員	御宝暦について
埼玉第七・八・九 合同	12月4日	344名	佐藤芳典 師 東京多摩 東福寺	仏さまに祈り、仏さまと出会う

※「講師」の肩書きは開催当時のもの

C. 各種講習会等の出講について

令和6年度 教区講習会 出講一覧

教 区	日 時	講 師	テーマ
東海・美江合同	7月26日	池田裕憲 智山教化センター所員	推奨する教化活動について
安房第一・二・三・四合同	8月29日	平野隆光 智山教化センター所員	「葬儀・法事を考える」 あらためて檀務を見つめ直し私たちの存在意義を 考察する
下総香取・茨城第二合同	12月4日	小杉秀文 智山教化センター専門員	現代における葬儀
上総第四	3月12日	小杉秀文 智山教化センター専門員 倉松隆嗣 智山教化センター所員	現代における僧侶のあり方

※「講師」の肩書きは開催当時のもの

令和6年度 その他研修会等 出講一覧

出講内容	日 時	講 師	テーマ
第63回 中央布教師会総会	4月24日	倉松隆嗣 智山教化センター所員	お大師さまと歩むことから始まる、仏さまとの出会い
第30回 智山寺庭婦人連合会総会	5月23日	中嶋亮順 智山教化センター所員	推奨する教化活動を実践する ～智山寺庭ハンドブックを利用して～
栃木北部教区 寺庭婦人講習会	5月24日	高橋一晃 智山教化センター専門員	傾聴の理論と実践 「臨床宗教師の経験を踏まえて」
智豊合同布教講習所	5月29日	倉松隆嗣 智山教化センター所員	弘法大師御生誕1250年記念事業について 10年後の弘法大師1200年御遠忌に向けて
第25回智山総合研修会 第三分科会	5月30日	倉松隆嗣 智山教化センター所員	令和6年度教化推進施策について
教師講習所基礎科3年次	6月27日	島 玄隆 智山教化センター所員	実践布教VI 法話実修
寺院子弟講習会	7月23日	長谷川理賢 智山教化センター所員	
教学研修所一般大学2期	8月23日	池田裕憲 智山教化センター所員	教化復習
教学研修所一般大学2期	8月24日	池田裕憲 智山教化センター所員	教化II 総合調査結果から真言宗智山派の現状と課題、写経体験、法話実習
教師講習所教化応用科3年次	10月8日	高岡邦祐 智山教化センター長	教化研究VIII 保護司・教誨師・民生児童委員 社会問題研究IV ディスカッション、各種窓口への 相談事例
教師講習所教化応用科3年次	10月9日	池田裕憲 智山教化センター所員	社会問題研究V 時事問題
教師講習所教化応用科3年次	10月10日	島 玄隆 智山教化センター所員	教化研究IX 祈願
教師講習所教化応用科3年次	10月10日	平野隆光 智山教化センター所員	実践布教VIII コミュニケーションと教化
寺庭婦人入門講習会	10月29日	船岡芳海 智山教化センター所員	知っておきたいお寺の作法
下総香取教区 寺庭婦人講習会	11月11日	中嶋亮順 智山教化センター所員	阿字観体験 お大師さまのご生涯について
東京北部教区 布教師会講習会	11月22日	高岡邦祐 智山教化センター長	真言宗智山派の教化推進とこれからの檀信徒教化 口説布教について
栃木南部教区 寺庭婦人会講習会	11月29日	倉松隆嗣 智山教化センター所員	智山寺庭ハンドブックの使い方
大正大学講義	11月29日	平野隆光 智山教化センター所員	仏教学基礎ゼミナールIV
埼玉第五 布教師会講習会	12月8日	上村正健 智山教化センター所員	御宝曆の解説
栃木中央教区 布教師会講習会	3月5日	高岡邦祐 智山教化センター長	現在の葬儀形態の変化について

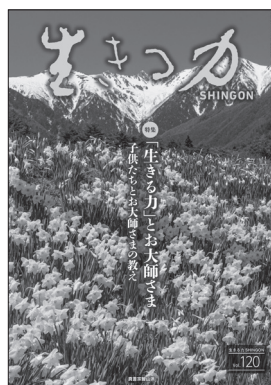
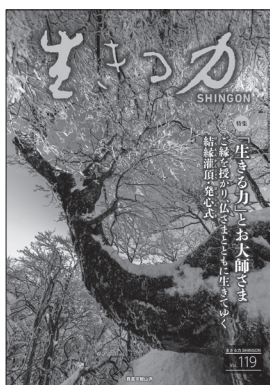
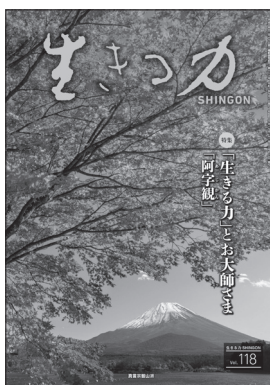
※「講師」の肩書きは開催当時のもの

D. 出版物と教化推進

※頒布数は令和7年3月31日時点の集計値

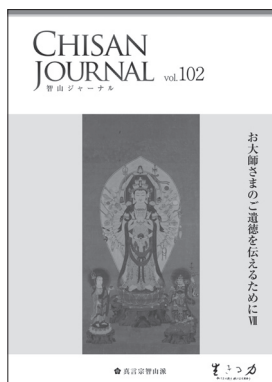
①生きる力SHINGON 檀信徒の「生きる力」を育む仏教総合教化誌

- 第117号** 令和6年6月1日発行 **頒布数102,812部**
特集 「生きる力」とお大師さま 一遍路で感じる同行二人ー
- 第118号** 令和6年9月1日発行 **頒布数50,030部**
特集 「生きる力」とお大師さま「阿字観」
- 第119号** 令和6年12月1日発行 **頒布数80,978部**
特集 「生きる力」とお大師さま ご縁を授かり、仏さまとともに生きてゆく結縁灌頂・発心式
- 第120号** 令和7年3月1日発行 **頒布数50,596部**
特集 「生きる力」とお大師さま 子供たちとお大師さまの教え



②智山ジャーナル 智山派教師の自己研鑽と資質向上を目指す専門誌

- 第102号** 令和6年6月1日発行
特集 宗祖弘法大師ご誕生1250年記念特集 お大師さまのご遺徳を伝えるためにⅦ
- 第103号** 令和6年11月1日発行
特集 真言密教の「加持感応」ー洒水加持ー
- 第104号** 令和7年2月1日発行
特集 真言密教の「加持感応」Ⅱーご宝号、祈りー



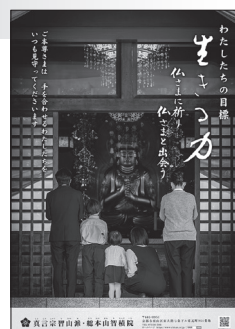
③ポスターカレンダー

令和6年9月1日発行
檀信徒頒布用
B2判カレンダー
「星曼荼羅」
1部110円
頒布数16,651部



④教化目標(わたしたちの目標) 啓発ポスター

令和7年3月発行
教化目標
「生きる力ー仏さまに祈り、
仏さまと出会う」の啓発と
お大師さまに手を合わせて
ご宝号を唱え、祈ることの
意義やその大切さを伝える
ポスター



⑤柱掛けカレンダー「今月の法語」

令和6年9月1日発行
檀信徒頒布用カレンダー
お大師さまの著作に学ぶ
～『遍照發揮性霊集』～
1部110円
頒布数117,434部



⑥檀信徒研修会チラシ

令和6年8月1日発行
総本山智積院開催の
「檀信徒研修会」
参加推奨のチラシ



⑦寺子屋かわらばん Vol.15

令和7年3月31日発行
寺子屋活動に関する
本宗寺院・教会の交流誌



⑧年報27号

令和6年6月1日発行
智山教化センターの
1年間の活動報告



⑨智山派寺院専用ウェブサイトからのダウンロード版

青少幼年教化資料

令和6年度寺子屋勉強会で提案した寺子屋プログラム「自坊写真を使用した神経衰弱ゲーム体験」と「お大師さまカルタすごろく体験」、「三人寄れば文殊の知恵」のアップロードを行った。また、「寺子屋かわらばん (ダイジェスト版)」のアップロードを行った。

<ダウンロード資料一覧>

- 寺子屋プログラムシート「境内風景写真で神経衰弱」
- 寺子屋プログラムシート「お大師さまカルタすごろく」
- 寺子屋プログラムシート「三人寄れば文殊の知恵」
- 寺子屋かわらばん Vol.15

III

教化推進レポート

1 現代仏教に期待されること－林住期の高年齢者を取り込めるか？

北海道大学大学院文学研究院特任教授、智山教化センター 専門員 櫻井義秀

1. はじめに

〔高齢社会と長寿化〕

2025年、団塊の世代が後期高齢者となることで日本人口の20%が後期高齢者となる。俗にいう2025年問題だが、認知症高齢者や独居高齢者が増加し、保険診療で支えられる医療費の総額は増大する一方である。2050年には高齢化率が約38%に達する日本において医療・介護・福祉を維持する財政は支えられるのか。

個人として人生の最終段階にたどり着くこと自体が容易ならざる事態に、現代人は直面している。今はやりの終活を意識して活動できる人はある程度生活に余裕がある人であるが、70代以降も働き続ける高齢者は増加の一途をたどっている。農林水産業や自営業、職人の人たちはもとよりそうなのだが、勤め人であっても退職後の悠々自適の人たちは減っている。就業率が60代後半で50%、70代前半で30%維持されているのは、長い老後への対応でもある。

65歳前後の退職期から人生の最終段階に移行する手前までの十数年間をどう過ごすのか。仕事の第一線を離れ、子育ても終わり、人生を充実させるべきこの時期に、健康寿命を維持するだけが生活の目的ではないだろう。よりよい時期を過ごせてこそ晩年に至るのではないか⁽¹⁾。医療関係者や臨床宗教師が気に掛ける死の臨床、つまり人生の最終段階は、この時期に先行する

十数年の間にどのような生活を送るにかにかかっているのではない。

〔サードエイジ期と林住期〕

近年、西欧では65歳から75歳の前期高齢者を含む高年齢者世代を、後期高齢者世代とは区別して、サードエイジ期（仕事や子育てを終え、人生の総仕上げと考える）と呼んでいる。古代インドには四住期（学生期、家住期、林住期、遊行期）の考え方があり、サードエイジ期は林住期に相当する⁽²⁾。

もっとも、2000年以上前のインドと20世紀後半の西欧では、平均寿命も人々のライフスタイルも異なる。インドではバラモンやクシャトリアといった階層でなおかつ長寿の人々のみが林住期や遊行期を経験できたに違いない。現代では平均的なライフコースの人々でも人生を充実させる時代を享受できるようになった。恵まれた時代ではないか。

しかしながら、現代の日本では手放しでこの人生の贈り物というべき時代を楽しめる人だけではない。75歳以上の高齢者の一歩手前にいる60歳以上の高年齢の世代は、老親の介護に一定期間従事せざるをえない。現在75歳を超えた団塊の世代はまだ兄弟姉妹が多かった世代であり、世帯全員が介護に携わったわけではない。そのために、親の介護にあたった人以外は、定年後も比較的悠々自適な生活を送れる人たちが多かった。私の親世代がそうであり、老

親の介護はやっていない。ところが、現在63歳の私の世代では一人っ子あり、二人だけの兄弟姉妹ありで、老親が自立的な生活ができなくなった段階で自分たちが介護を担うことになる。遅い結婚であればまだ子どもが大学を終わっていない年齢であり、子育てと介護の二重負担を負うサンドイッチ・ジェネレーションである。この世代は、兄弟姉妹数の減少と高等教育の拡大、長寿化を迎えた産業社会において、第二次世界大戦後のベビーブーマー以降が経験している世界共通の現象と指摘されている⁽³⁾。

また、人生に余裕ができる時代とはいえ、勤め人の場合、男性は特に職場の縁を失って社会関係が細くなり、孤独に陥りやすい世代でもある⁽⁴⁾。「働く（社会的役割を持つ）－居る（人間関係と居場所の確保）－遊ぶ（自分の時間を持つ）」のバランスをどう保つのか、重要なライフイベントに差し掛かっているとみえる。

私はこの世代に現代仏教はもっと着目すべきではないかと考えている。団塊の世代は、2025年問題で超高齢社会の象徴として現在議論されているが、マスとしての扱いであり、個々人の生活がどうであるのか、現在どういう課題を抱えているのか、何を思い悩んでいるのかについて踏み込んだ考察が少ない。

日本のサードエイジ期・林住期にある人々のポテンシャルは高い。団塊の世代といえば、合理的で疑り深い、熱い気持ちを持っており、労働運動や学生運動が華やかし頃の世代でもある。志や探究心を持った人々のことを知り、この世代を寺院に関わる人たちと認識することで、仏教に新しい展開が生まれてくる可能性がある。

[寺院仏教の縮充]

私はこの10年余り、人口減少と地域寺

院のあり方を関連させる調査研究を全国各地で行ってきた。また、浄土真宗本願寺派の宗勢調査をはじめ、他の宗門の調査活動にも加わり、日本の寺院仏教の将来も展望してみた。日本社会の人口減少や家族の個人化（世代ごとに居住地を変えるために三世代家族が全世帯の10%を切る、生涯未婚率の上昇と長寿化によって老若男女の独居世帯が世帯の半数近くを占めるに至る）といった趨勢とほぼ合致した問題が生じていることが分かっている⁽⁵⁾。

- ①檀信徒の高齢化と減少、および信仰の世代間継承が困難になる三離れの深刻化。
- ②寺院の運営基盤が弱体化し、3分の1から半数で後継者不在、兼務、合併、廃寺が増加。
- ③地域寺院の不活発化、教師の納金や寺院付加金の大幅減少による宗門の財政難。

この問題に対する処方箋は、現状を正確に認識し、寺院や宗門の規模を縮小した上で残すべき仏教としての機能を充実させる「縮充」の方策を考えていくしかないのではない。残念ながら、寺院や教勢の実態把握を終えた後に、この残すべき機能について検討がなされている報告はあまり見当たらない。

消滅の可能性があるといわれる自治体であっても、首長・議員・職員および地域住民ともに現状を維持したいと思っているが、それが無理なことも十分わかっている。しかし、誰がそれを言い出すのか、回りをうかがっている状況である。寺院においても状況は変わらない。このままではダメだと工夫できる寺は動き出し、檀信徒や参拝者を増やしているところもある。とはいえ、これも自治体間の競合に似ており、似たような若年人口呼び込み策で人口の奪い合いが生じ、少子化そのものの進行は止められ

ない状況が生じている。

人口減少地域の自治体には、サバイバル・レースでパイの奪い合いに限られた予算を使うのではなく、真に求められている住民ニーズに応えていくことが求められている。そうであれば、寺院もまた社会のニーズに耳を傾けるべきではないか。

現代人が仏教や寺院に何を期待しているのか。檀信徒はどうか。寺とまだ縁のない一般市民はどうか。私のサードエイジャー調査によれば、団塊の世代は個々の寺院のサバイバルに付き合う気は毛頭ない。しかし、仏教に何かあるのではないかと期待している人はいる。

私の周辺においてサードエイジ期にセカンドライフの意識を持ち、病を経て人生を考え直す経験をした人は仏教に深い関心を持っている。ところが、こういう人たちは、書店で仏教書を購入して読み、四国遍路や霊山登拝、古刹名刹で高僧の説法を拝聴しても、地方寺院や菩提寺の住職と親しく話をした経験がある人は少ない。寺は70代後半から80代の高齢者が主役の場所と心得ている節がある。

僧侶に気軽に話ができない。仏教に関する素朴な疑問など口にしたら怒られるのではないか。おじいさんやおばあさんがやってきた信行に関心はないが、相談にはのってもらいたい。しかし、話の合うお坊さんに会ったことはない、といった人が多いのである。

単刀直入にいおう。檀信徒としてこの団塊の世代を取り込めないようでは、次の世代に寺に来てもらうことは叶わない。祖父母に連れられて孫は来るかもしれないが、親が来るかどうかである。その親は、自分の親がやってきたことをそのまま引き継ぐとはしないだろう。

年をとって親を亡くせば否が応でも仏事

に携わらざるを得ず、自然に宗教心がわいてくることを期待できた時代に、信仰は加齢効果として現れていた。しかしながら、現代にその期待はできない。親と住む場所を異にし、生業や職位、ライフスタイルを異にした子世代に、三世代家族や地域社会でひとりで身体化できた宗教心や慣行を身につけてもらうことを期待することに無理がある。檀家の継承を期待するのであれば、高齢者になる前に子世代・親世代に寺院に来て行事に積極的に参加してもらい、儀式の意味と意義を確認してもらわなければいけないのだが、それをやれている寺院は少ないのではないか。

現在の高齢者層のあとに次の高齢者層が自動的に続くわけではない以上、サードエイジ期にある世代に今働きかけなければ、その後は全くなくなると私は考えている。

檀家制度の危機は人口減少や高齢化にあるのではなく、信仰継承を家族でも寺院でも行っていないことが根本的な要因としてある。

次の節では、2021年に実施したサードエイジャー対象の調査（60歳以上79歳未満の全国の約1100名を対象にした割当法によるインターネット調査）から、サードエイジャーの死生観と宗教者、とりわけ仏教や寺院、僧侶に対する認識を明らかにしていきたい。

この世代を取り込めるかどうかは、まずこの世代の意識と行動様式を知らなければならない。

2. サードエイジャーの死生観と 仏教への認識

[サードエイジャー調査]

本調査では、日本リサーチセンターに依頼して、2021年5月14日から19日にかけ

て全国の60歳から79歳までの男女を対象に「セカンドライフに関する意識調査」と題してインターネット調査を行った。目標回収数を1000とし、2056人に協力依頼を実施し、回収率は60代で50.7%、70代で54.4%、全体で52.4%という結果となった。標本抽出法は割当法であり、男女(476人・524人)、年齢(60代543人、70代536人)、都道府県の人口分布に応じて割り当ててある。

この世代は、活動的な高齢者であるために医療や介護の課題は先延ばしにされ、人生の最終段階における医療や葬儀・法要などを終活として準備する人もそれほど多くはない。サードエイジ期に属するアクティブな高齢者が、①セカンドライフ期における役割と生きがい、②家族、地域、第三の空間における居場所、③文化的活動やスポーツ、宗教行事への参加など日常を離れた遊びの空間を日常生活において再編成し、工夫をした生活を行っているのか、という点に注目した調査内容となっている。本調査の詳細な報告は、櫻井義秀・清水香基編『東アジアのアクティブ・エイジング―サードエイジを生きる』(北海道大学出版会、2025年)を参照していただきたい。ここでは、死生観と葬儀、仏教や寺院に対する認識にかかわる限りでの報告となる。

まず、対象者の宗教信仰の有無や教団ごとの分布を示しておく(表1)。

仏教の純然たる信仰者であり、かつ檀家として寺院に所属している人々の総計が約3割というのは、その他の統計にも合致している。それに対して、神道が約8%と少ない。おそらく、この世代は、地域の町内会が神社の氏子として氏子費(氏子拠出金)を頭割りで収めることに対して慣習だから許諾するとはなかなかいかない世代かもしれない。逆にキリスト教徒が3%弱と、日

表1 対象者の宗教信仰(複数回答)

仏教	30.2%
神道	8.3%
プロテスタント	1.8%
カトリック	1.0%
ユダヤ教	0%
正教会	0%
イスラム教	0%
その他の宗教	1.0%
宗教を信仰していない	58.2%
わからない・回答したくない	7.3%

本全体で約1%に届かない信者人口からいって高めに出自している。無宗教者が6割を超えるのは、他の社会調査でも確認されているところである。

[葬儀と法要]

コロナ禍で会葬者を呼ぶことが難しくなり、家族葬が一般化し、火葬場の炉前読経で終わる直葬の依頼が増えたといわれる。従来いわれていた葬儀の簡略化(直葬や一日葬)が一層進行し(日経ビジネス、2021年2月9日)、コロナ明けでも元に戻る様子はない。年間約160万人が亡くなる多死社会となっても、葬祭業や葬儀を行う寺院の運営は逼迫している⁽⁶⁾。

調査対象者に自身の葬儀で望む形態を尋ねたところ、一般葬は約20%、家族葬が約43%、直葬が約15%、遺族に任せるが約21%だった(表2)。会葬者を呼び、香典を包んで親戚や会社、近隣関係を維持することに葬儀を活用するという発想はかなり廃れたようである。むしろ、故人を追悼するグリーフケアに葬儀の軸足が移っていると見てよい。家族だけで悲しみを分かち合

い、親戚づきあいの煩わしさでこの時間を失いたくないという気持ちの表れでもある。

ただし、悲しみに浸ることで喪失感が癒えるわけではなく、悔やみの言葉を受け取る慌ただしさの中で日常を回復していく効果もある。葬儀や法要にはグリーフケアの機能もあるのだが、そのことはあまり注目されていない。この点は海外のグリーフケアやスピリチュアルケアの研究者に着目されているので、日本の医療関係者にも知ってもらいたいところである。

葬儀の簡略化は、没後作僧として戒名・法号を授けることで浄土へ生まれ変わる、仏になるといった観念が薄れてきていることを示している。これは直葬が典型的である。この後に年忌法要が営まれることもないだろう。

墓についての希望をみると先祖代々の墓や家墓が約40%、永代供養墓が約14%、散骨や樹木葬が20%であり、手元供養が約5%ある。家墓の割合が比較的高いが、すでに墓があるからという理由が多いだろう。ただし、子世代に墓守を期待しなくなれば、永代供養墓・合祀墓、散骨や樹木葬、手元供養の選択になり、家墓の割合に匹敵する。日本の家族変動からしても、いずれ後者の割合が高くなることが予想される。

年忌法要に着目すると、行う必要がないとする意見が半数を占め、故人を偲ぶ人とその気持ちがあれば良いということなだろう。一周忌だけというのはいかにも早すぎるが、三回忌、七回忌までとする人で約4割である（表3）。

法要を行う必要がないという回答者は、仏教式の追悼・廻向の意義を認めないのか、そもそも死後の世界や靈魂をも認めていないのか。この世代の特徴として、死後の靈魂の存在や生まれ変わりを信じる者は2割に満たず、どちらともいえない者が3分の

表2 自身の葬儀と墓をどうするか

一般葬で家族墓 (〇〇家の墓、先祖代々の墓)	15.2%
一般葬で永代供養 (合祀墓・霊廟)	2.3%
一般葬で自然葬 (散骨や樹木葬など)	2.7%
家族葬で家族墓 (〇〇家の墓、先祖代々の墓)	25.4%
家族葬で永代供養 (合祀墓・霊廟)	8.1%
家族葬で自然葬 (散骨や樹木葬など)	9.8%
直葬(葬儀なしで火葬のみを行う) で永代供養(合祀墓・霊廟)	3.7%
直葬(葬儀なしで火葬のみを行う) で自然葬(散骨や樹木葬など)	7.5%
直葬(葬儀なしで火葬のみを行う) で手元供養(埋葬・納骨しない)	4.5%
遺族やなりゆきにまかせる	20.8%

表3 年忌法要の実施予定

一周忌まで	8.3%
三回忌まで	14.6%
七回忌まで	19.7%
三十三回忌まで	4.0%
慣例に則った法要を 行う必要はない	53.4%

1としても、半数の人々が人は死んで灰・土に還るという観念を持っている。戦後の科学的合理的な教育の成果でもあり、前世代から宗教文化を全面的には受け継いでいないことの表れである。

【寺院・僧侶は求められているのか】

団塊の世代を含む高齢者は合理的な思考を持ち、科学技術や経済力で世界を牽引してきた日本を経験した世代である。この世代が宗教や仏教、寺院や僧侶に対して厳しい見方をすることは想像に難くない。

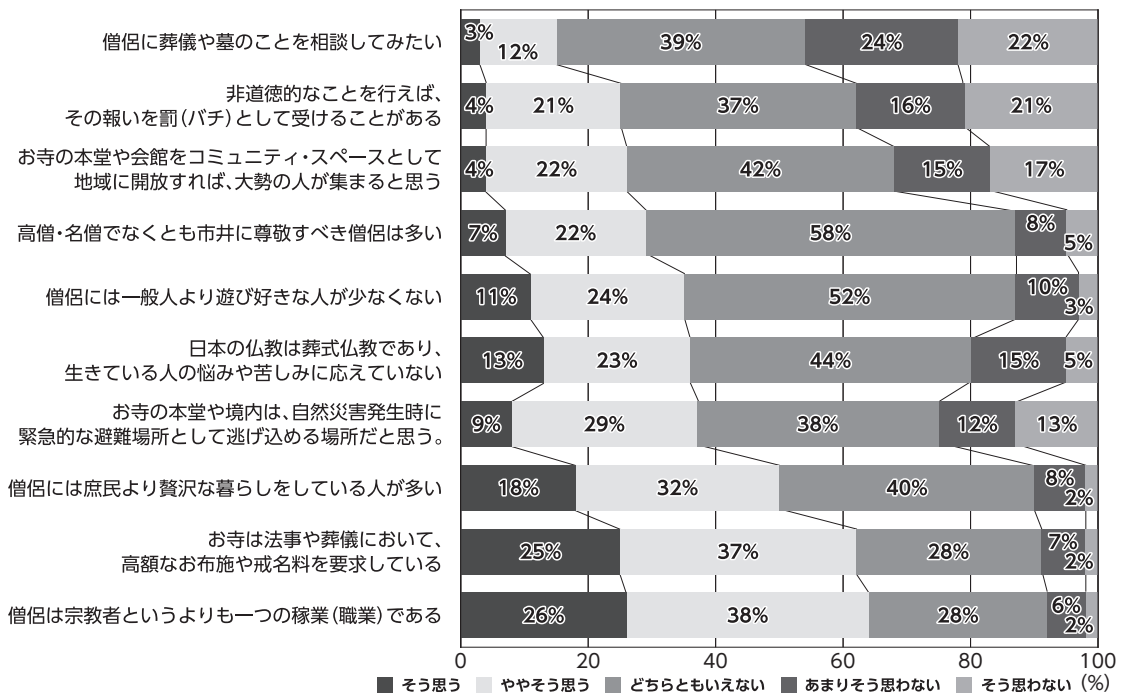


図1. 寺院・僧侶への評価・期待等に関する項目

図1をご覧ください。10項目の中、5項目が僧侶に対する評価であり、4項目が寺院の役割に対する評価、1つが仏教的な因果応報の観念を問うている。

身近に寺院や僧侶と接したことがない人にはわからないという評価が最も多いが、葬儀や法事とおして接する僧侶や寺院に対するイメージは決して良いものではない。寺院が地域の第三の居場所や緊急避難の場所として活用されることを想定する人は2分の1に満たない。これは宗派仏教および檀家制度のために、檀信徒でなければ寺院を利用できないし、僧侶にも相談することができないという意識が強いことを反映している。その意味では、寺は神社のように地域に開かれている宗教施設ではないのである。

仏教それ自体は日本の伝統文化であり、ハイカルチャーとして評価されているのだが、それらは名刹古刹の寺院や国宝・重要

文化財といった、仏像や仏教建築、および仏教思想に対して向けられたものであり、必ずしも日常生活において接している僧侶や寺院に対する評価となっていないことに仏教関係者は心すべきではないだろうか。

このことは、僧侶や寺院に対して何を期待するのかという評価にも明確に反映されている。言葉に衣を着せずにいえば、仏法僧は帰依の対象になっていないどころか、現世の諸問題や仏事や宗教文化に関わることについても相談する相手や場所になっていない。

それにも関わらず、お寺から離れずにいる人も相当数いるということである。調査対象者のうち、無宗教の人は58%である。しかし、仏教徒は30%である。要するに、檀家の人たちである。これらの人たちが仏法や僧侶の祈願・祈祷に験力を認めず、期待もしていないということはどういうことなのか。

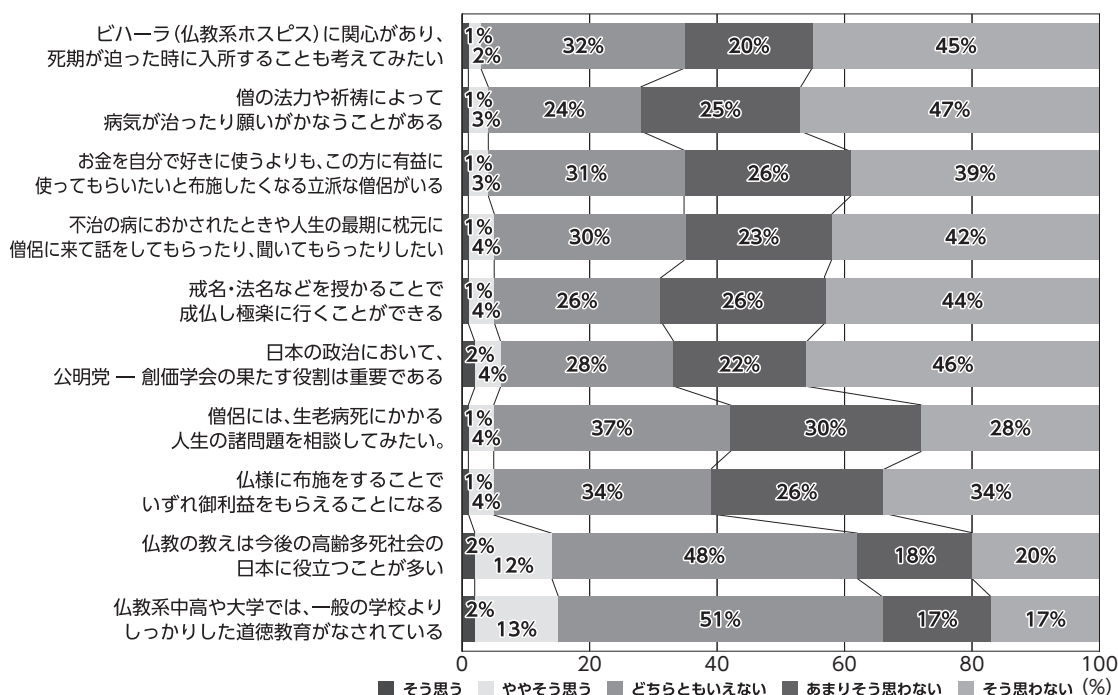


図2. 宗教・僧侶への期待等に関する項目

図2を見ると、ビハールに対するニーズは3%、ベッドサイドで僧侶に傾聴を求めるニーズも5%と低い。この数値は、判断できない人が3割程度いるものの必要ないという人が大半だったからである。ビハール活動に取り組まれている宗派や臨床宗教師に現代仏教の活路を求めている僧侶には厳しい数値である。これは単に、知られていないということなのか、知ったうえで必要ないと考えているのか。

宗教者や臨床宗教師によるスピリチュアルケアが求められているということで、宗門系大学他で人材養成がなされ、病棟での実習先としても現場を増やすことが求められている⁽⁷⁾。しかしながら、ビハール医療福祉会が運営するあそか花屋町クリニックは、2024年3月に閉院した。また、本願寺派はあそかビハール病院の運営からも撤退し、同病院は一般社団法人として現在運営されている。また、立正佼成会が経営母体

で信者による傾聴ボランティア活動が行われていた佼成病院も学校法人杏林学園に譲渡されている(中外日報、2024年4月19日)。

急性期医療のように施術や薬剤を積極的に用いないホスピスは病院として経営が難しい。ビハール僧の病院スタッフとして雇用が実施された数少ない現場が消えることは残念だし、宗門や教団として財政的に支えきれない状況もやむなしのところはある。しかしながら、一番の問題は、ニーズが増えていないことである。それがなぜなのか、この点を掘り下げていくことも重要ではないか。

僧侶に現世利益を求めて祈祷を依頼する指向性は、日本の高年齢世代に多いとはいえない。もちろん、現在も各処で病氣平癒、開運、合格・良縁といった祈願や祈祷が行われており、ニーズがないわけではない。しかし、これは人生に前向きに取り組む人をさらに後押しする効果を発揮する一

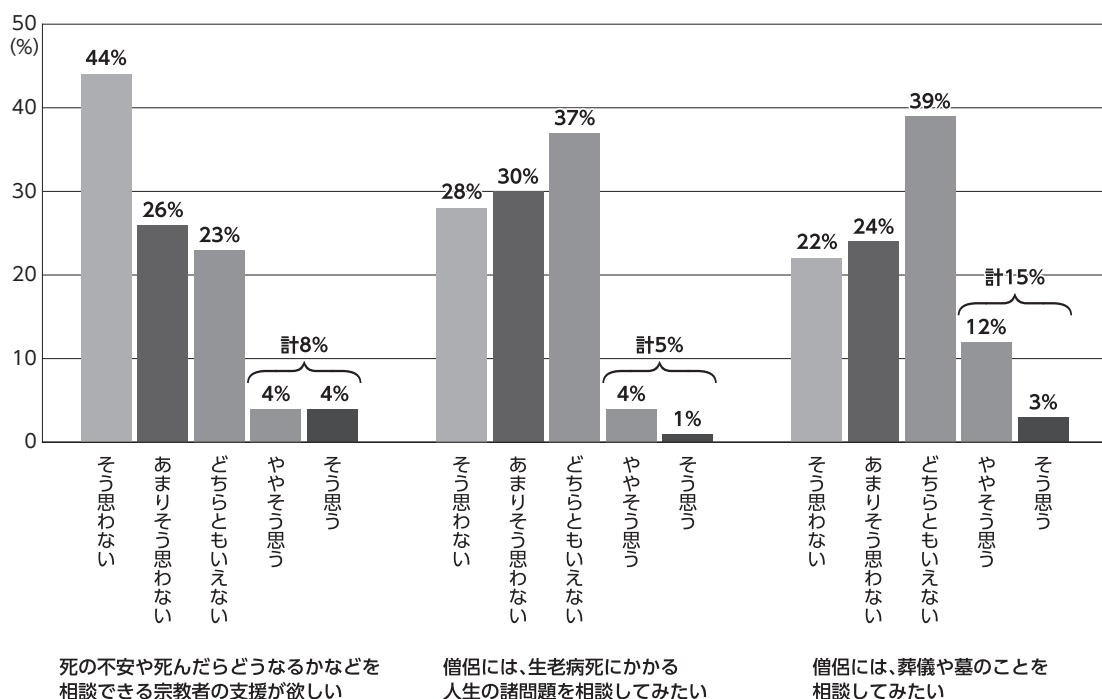


図3 僧侶に何を期待するのか、しないのか。

方で、ポジティブな思考になる人を増やしているわけではないことに注意したい。困りごとの相談相手として僧侶が選ばれていないことの意味は大きい。

現在、市中の精神科クリニックや心理療法を行うカウンセリングでは、初診の1ヶ月待ち、2ヶ月待ちが普通という。それだけニーズがあるともいえるし、これまで宗教施設が対応していた悩み相談が医療施設に移行し、セラピーの医療化が進展した結果でもある。しかしながら、保険診療でこうした個人の悩みや人間社会の葛藤まで対応するようになると、社会保障が持つのだろうか。

宗教者や僧侶に対する期待を図3にまとめてみた。期待しないという人たちが半数を超すことは間違いない。これをもって仏教関係者は遺憾であると檀信徒への教化不足を反省すべきなのか、一般市民の無理解さに落胆すべきなのか。

筆者は、宗教者に相談したいという8%

の人々がいること、僧侶に人生の諸問題を相談したいという5%の人々、葬儀や墓のことを相談したいという15%の人々にまずは対応し、その後、現代社会における仏教の役割について理解を求める活動をすべきではないかと考えている。

1つだけ、宗教者を喜ばせかねないデータを追加しておこう。國學院大學研究開発推進機構日本文化研究所編（2022）の学生宗教意識調査⁽⁸⁾によれば、人生に悩んだときに相談したい宗教家（複数回答）として、僧侶約21%、牧師・神父・シスター16%、神主14%、霊能者4%、占い師8%、ネット相談8%、相談したい宗教者はいない62%であった。4割弱の若者が、宗教者に相談を求める可能性があると解釈できるだろうか。

宗教系大学の学生が44%を占めることから、宗教系科目を取得し、礼拝や祭礼・仏事への出席機会もあることから中高年の人々

よりも宗教者に親しみを感じている可能性はある。しかし、調査対象の学生たちは、輪廻転生、霊界、神霊的な存在、パワースポットなどスピリチュアルなものへの親和性が高年齢世代よりも高いことを明記しておきたい。アニメやゲームなどバーチャル・リアリティになじみやすい感性を持っている。それが宗教文化や信仰の伝承にプラスに働くのか、カルト団体やスピリチュアル・ビジネス、陰謀論などに対する脆弱性が出るのか。壮年世代がどのような価値意識や生活態度のモデルを示せるのか、家庭や職場、ネット社会においても問われるのではないか。

3. おわりに

日本社会の人口変動や家族の構造変化、および経済や財政の状況を考えたときに、医療や介護の制度はサステナブルなものではなく、施設への入院・入居は難しくなり、ケアにあたる人材の不足も顕著になることが予想される。こうした状況を予測しながらサードエイジ期や林住期を生きる高年齢者たちは、必ずしも死の臨床にかかわる宗教者たちの活動に期待しているわけではないことが調査からわかった。そして、今抱えている問題の相談相手として宗教者を想定してすらいらないこともデータから明らかになった。

死の臨床や死のあり方にこだわる専門家たちの時代認識や現代社会のとらえ方に、一般市民との間でズレがあるのではないだろうか。また、宗教者、とりわけ葬儀・法要ということでグリーフケアに独占的に関わり続けてきた寺院仏教と僧侶は、市民のニーズに対応できているのだろうか。

100年に1度の災害が毎年起きる気候変動、日本が経済力を減退させていく経済変

動、そして世界各地で戦争や紛争が常態化している国際政治を見すえていかざるをえない時代である。現代のような社会状況において何を行えば社会がよくなり、人々のウェルビーイングが高まるのか。答えは1つではない。しかし、いくらでもあるともいえない。

宗教に現代人がなお希望をもち続けていることを信じ、試行錯誤するしかない。

参考文献

- (1) 小田利勝『サクセスフル・エイジングの研究』学文社、2004。
金子勇『日本のアクティブ・エイジング—少子化する高齢社会の新しい生き方』北海道大学出版会、2014。
春日キスヨ『百まで生きる覚悟—超長寿時代の「身じまい」の作法』光文社、2018。
- (2) 五木寛之『林住期』幻冬舎、2007。
山折哲雄編『「林住期」を生きる—一家や仕事を離れて第三のライフステージへ』太郎次郎社、2000。
- (3) Kim Parker and Eileen Patten, 2014, 'The Sandwich Generation: Rising Financial Burdens for Middle-Aged Americans,' Report, Pew Research Center, January 30, 2013 2024年9月30日閲覧 (https://www.pewresearch.org/social-trends/2013/01/30/the-sandwich-generation/)
- (4) O'Brien, R., 2005, 'Theorizing masculinities: Men, social connectedness, and social networks.' Sociological Research Online, 10 (4) , 1-16。
斉藤雅茂、冷水豊、山口麻衣、武居幸子「大都市高齢者の社会的孤立の発現率と基本的特徴」『社会福祉学』50巻1号110-122頁、2009。
- (5) 櫻井義秀・川又俊則編『人口減少社会と寺院—ソーシャル・キャピタルの視座から』法蔵館、2016。
櫻井義秀『人生百年の生老病死—これからの仏教 葬儀レス社会』興山舎、2020。
- (6) BSR推進センター「寺院における新型コロナウイルスの影響とその対応に関する調査」結果報告各年、2020-24 (同センター https://chikouken.org/activity/activity_cat06/)
- (7) 谷山洋三『医療者と宗教者のためのスピリチュアルケア』中外医学社、2016。
藤山みどり『臨床宗教師—死の伴走者』高文研、2020。
- (8) 國學院大學研究開発推進機構日本文化研究所編『第13回学生宗教意識調査 (2020年度) 改訂増補版』、2022。

2 AIテクノロジーと教化活動

最新のIT情勢と宗団と寺院の直面する課題について

約10年前、智山ジャーナルに「宗団、寺院はネット社会とどう向き合っていくか」という題で拙稿を掲載させていただきました。情報複製と発信のコストがほぼゼロに近づくインターネット社会においては寺院運営もその影響を免れえず、特に情報公開については、寺院や宗団は歴史的文物や教学、教化系の情報に誰もがネットでアクセスできるようにするべきである点を指摘させていただきました。10年後の現在、そこで述べた情勢分析と提言について変更をするべきことも特段見当たりませんが、この10年で登場した新しい技術やネット社会における動向などを踏まえ雑感を書かせていただければと存じます。

10年前と比較すると主要SNSにおいて利用者数は順調に伸び、ほぼ飽和状態になりつつあるように見受けられます。Tiktokなどの新たなSNSの参入はありましたが、ほぼ10年前にメジャーだったものがそのまま現在も主要SNSとして揺るがぬ地位を築いているように思えます。また黎明期の勢いから現在は停滞期、安定期に向かっており、またSNSによって引き起こされる社会問題がより鮮明になりつつあります。

SNSの浸透による社会の分断と炎上

かつて拙稿で指摘したとおり、ネット内にカルト化したコミュニティが出現する点や、デマや炎上案件といった問題は、現在いよいよ顕在化しているといえるでしょ

智山教化センター 専門員 吉田住心

う。SNS内では「エコーチェンバー」と言われるように、各個人にとって耳障りのよい話のみが集まり易くなるため、デマや陰謀論などに極端に傾倒する人々が増え、そのテーマや主張によっては極めて攻撃的になり、誹謗中傷などにより裁判沙汰になるケースも散見されるようになりました。彼らの中には集団的な意識はなく、単にネット内の偏った情報に流されるまま他人を攻撃したり、また自らの危機感や、義憤に駆られて反社会的行動に加担してしまう人も多く、また攻撃的な行動には参加せずとも、善意やシンパシーからデマや反社会的な情報を拡散してしまう人々も見受けられます。

我々僧侶は社会において公的な存在ですので、たとえ善意の気持ちであってもこの手のデマ、フェイクの情報を拡散してしまったら、その情報如何によっては社会的責任を厳しく問われる時代になりつつあることは留意すべきことでしょう。これは本人がSNSで拡散している場合は極めて問題になりますし、またSNSをやっていないくても、法話など公の場での発言が他者のSNSを通じて拡散される可能性も考慮にいれるべきです。また一方では今までドメスティックな問題だったさまざまなハラスメントやモラルハザードがSNSの登場で「見える」化される時代ですので、それによる炎上案件も非常に増えております。その意味では、現代は極めてメディア・リテラシーが問われ、また日頃の行いに注意を払うべき時代になったと言えます。またこれら憎悪の応酬に対して伝統的宗団として和解と慣用を説く必要性は益々高まっていると感じます。

III

教化推進レポート

SNSの発達による業界の影響

さて、ネット社会の発展によりさまざまな業界で変革が起きましたが、特に出版業界ではこの10年余りで大きな変動が起きました。まず既存の紙媒体に固執した出版社は軒並み衰退しました。特に消費型メディアの象徴である新聞や雑誌のような出版物の衰退が著しい状況です。印刷物ベースでの出版業界全体の売上は20年前と比較して半減し、その中で最も凋落が激しいのは雑誌で、売上は3分の1に縮小しています。そして2013年以降この凋落傾向を食い止めたのは電子出版であり、DX（デジタルトランスフォーメーション）への移行に成功し、版權で稼ぐビジネスモデルに転換できた出版社は大きくその業績を伸ばしています。特にコミックや小説を中心とした、アニメ化、映画化といったメディアミックスはSNSとの親和性が非常に高く、かつては出版全体の1割強でしかなかったコミック市場がこの10年でシェアの5割近くに迫る驚異的な状況になっています。

この成功にはフリーミアム（無料公開）化という考え方が大きく影響しています。例えば、作家がSNS上に作品を無料掲載し、大きな反響を呼び、その後、出版社から依頼され電子コミックでの販売や、製本化されるという事例が非常に増えました。購入する側も「何度も読み返したい」「製本を愛蔵したい」、あるいは「作者を応援したい」という動機で購入するケースが増え、またそのような熱心なファン層はSNSを通じて積極的にその作品の素晴らしさを発信するようになります。これは寺檀関係で言えばまるで篤信の檀徒がいるような状況がそこかしこで生まれています。例えば筒井康隆氏の30年前の小説が、一人のインフルエンサーがSNSで紹介したことによ

り十万部の増刷になった事例がありますが、このように時代に関係なく、よい作品であれば、何度でも話題の俎上にのぼり、市場が掘り起こされることも現代のネット社会の特徴の一つです。

いずれにせよ、この10年の出来事で注目すべきことは、DX化をしていない業界は衰退し、うまく対応できた業界は成功している点です。そして何よりも情報の過度な囲い込みをするのではなく、フリーミアムによって間口を大きく開き、SNSの口コミ力を活用してより多くの人々に作品へのアクセスを増やしていくことにより、熱心なファン層とともに市場を作り上げるようなビジネスモデルが主になりました。

同時にかつての大手メディアが一大キャンペーンをはって流行を作り出すといったビジネスモデルは、現在のSNS内では敬遠されがちです。このような恣意的マーケティングは炎上の対象となってしまう、逆に評価を下げてしまうのです。よって大手メディアは、SNS上で評価を獲得した作者や作品を、あくまでも支える側としてビジネスに繋げるというアプローチになります。その意味では作り手側が昔よりも尊重され、大切に扱われるようになったと言えるでしょう。なぜならばメディア側が作者に対し礼を失するような対応をすれば、それもファン層にとっては大きな炎上案件になるからです。

各寺院としての現状と課題

さて、現在の宗内寺院のSNS利用状況を概観すると、この10年間でSNS利用寺院数は大きく増加しました。ここ数年のトレンドを見ると、特にInstagramの利用寺院は爆発的な伸びを見せております。私が調査した限りですが、2021年に40カ寺

程度であった宗内のInstagram利用寺院数は、2024年時点で150カ寺以上であり、近年この伸びは急速で調査が追いついておらず、この数より遥かに多い数の寺院が導入しているようです。これは導入の手軽さと同時に寺庭の方々の間で口コミ的に利用が広がっているようで、主に御朱印や行事、また季節のたよりといった歳時記的な投稿が目立ちます。ヨガ教室や写経会などの予定をカレンダーごと写真に収めて投稿するなど、参加者に向けた情報発信などにも手軽に使っているのが目につきます。

さらに増えていると感じるのはLINEの公式アカウントを導入している寺院です。FAXを持つ家が激減している点を考慮すれば、紙ベースの連絡よりも、スマートフォンで撮影した写真のやり取りなどが手軽に行える点や、個々のやり取りが履歴に残るなどのメリットが大きいため、こちらへの移行が今後主流になっていくものと思われます。

またX（旧Twitter）やyoutubeに目を移せば、フォロワー数が1万人以上のインフルエンサーと呼べる寺院も散見されるようになりました。特にX、youtube、Instagram等のSNSの世界では各寺院の影響力が大きな格差が生まれていく時代になるように思われます。同時にインフルエンサーと呼べる寺院では、炎上の対象になる可能性はフォロワーの多さに比して多くなります。影響力が大きい存在になればなるほど、日頃の一挙手一投足に対して細心の注意を払わなければならなくなります。また炎上という観点からは、例え寺院でSNSを運営していなくてもSNSを中心とした衆目から決して逃れることができない時代になりつつある点には留意が必要です。

現在ある寺檀関係をこれからも維持することを考えるならば、檀信徒の新しい世代

の人々がネット内で菩提寺の評価をリサーチすることを当然我々は頭に入れなければなりません。昔ならば先祖代々の受け継いできたものを無条件に受け入れる土壌があったかもしれませんが、今は意味論が問われる時代ですので、菩提寺を守る必要性に意味を見いだせない檀徒が益々増えることを考慮すべきです。つまりネット展開以前に、最低限、各檀信徒にとって守るに足る、心の拠り所としての価値ある存在であることが一層求められる時代になったと言えます。ただ、地元から離れる檀徒の多い現代、距離の克服という点でSNSによる繋がりは益々重要になるでしょうし、信仰に足る場であることがネット上で「見える」化されていることが理想であると思います。

さて、もう一点、人の流動が激しい現代社会において、既存の檀信徒を菩提寺に繋ぎ止めるために重視すべきことがあります。それは寺院の縁起に関する事柄です。その寺院の開基や成り立ちについては、その地域社会の郷土史と密接な関わりを表し、檀信徒の先祖の記憶との繋がりを辿る大きな財産です。寺院縁起を中心にその地域の郷土史を今一度掘り起こして、たとえば、ゆかりある武将の物語を新たに作り出して檀信徒と共有することは、帰属意識、故郷への憧憬の喚起なども含め非常に重要であると思います。そしてこれらは、他の寺院と決して被らない独自のものだからこそネットとの親和性があるのです。昔であれば地域の語り部によって受け継がれてきたものが、過疎化や核家族化などにより途絶えてしまった今、寺院を中心に再び掘り起こし、そしてネット上で展開をしていくことは遠く離れた縁ある人々を繋ぎ止めるため、あるいは掘り起こすためにも非常に効果的手段になりえます。

宗団としてどうあるべきか

さて、それでは宗派としてこの潮流にどのように対応するべきでしょうか。これは上記に挙げた現代の出版業界の状況というもの非常に参考になるように思います。DX化できた出版社と対応できずに衰退している出版社の違いで最も大きな部分は、単にデジタル化をした、しないという面に留まらず、作家、作者個々を大切に扱い、あくまでも黒子に徹してサポートをする側にまわる、あるいはネット上で注目を集めた作品などに常にアンテナを張り巡らせて、自社の出版社へのスカウティングを怠らないといった「能力ある個」への対応の違いが浮き彫りになっていると言えるでしょう。

その意味で宗団内にいる能力ある教師のリサーチと内外への発信、バックアップ、ブランディングなどが一層重要になりますし、また宗外であっても、宗派に関連したインフルエンサーへのアプローチなどは極めて重要になります。具体的に言えば、両祖大師や宗派に縁のある人物などを題材にしたり、また作品内で取り上げた小説や漫画などのリサーチ、作者へのアプローチ、講演会や機関誌、SNSなどでの発信も含めた関係構築などは非常に大切です。上記で、各寺院においては、その寺院縁起などが重要と語りましたが、宗団としては宗祖や中興について、今一度現代社会の人々の心に刺さる物語を構築する努力をしてもよい時期かもしれません。また映画『空海』など過去の作品についてもその再拡散を含めた活用を考慮すべきでしょう。

次にネットの炎上問題などに目を移せば、常に一般社会の衆目に注意を払い、業界内の「内輪」のドグマに縛られず、コンプライアンスを意識する態度が必要になります。業界内の常識であっても、一般社

会的に非常識な問題であれば、それが「見える」化されやすいネット社会においては細心の注意を払わなければなりません。またこの手の問題は組織が大きくなればなるほど多くの問題が発生するジレンマを抱えることになるため、内外に透明性高く真摯に宗団としての立場を表明する説明能力が益々要求されるようになります。

そしてこれからの時代は巨大な組織であればあるほど、業務の効率化やペーパーレスも含めて、DXへの移行は喫緊の課題になります。とはいえ我々は伝統的宗団です。儀礼、儀典など先人より受け継いできた前例を踏襲することこそ価値を見出す部分と、新たにITを導入して効率化する部分をしっかり見極めることは大きな課題となるでしょう。

ここ10年における技術進化の最大のトピックとしてのAI

さて、ここ数年のIT業界での出来事で最も重大なことは、なんといってもChatGPTを初めとした生成AI技術の急速な発展です。ChatGPTが出現する以前、2019年12月の宗報に新井紀子氏の『AI vs 教科書が読めない子どもたち』の書評を書かせていただきました。著書ではAIは東大入試で合格できるかという課題に取り組んだ経緯と共に、2019年時点のAIは「文脈を理解できない故にクイズの問題には答えられるが、深い文章理解が必要な東大入試などでは決して合格点を取ることができない」と結論付けていました。当時のAIは2010年代中盤に入り将棋、囲碁でAIがプロ棋士を破り、事実上これらの対戦においてはAI優位になった時代でもあります。これはルールある理詰めの世界におけるAI優位という話であり、一般的常識、

社会通念など歴史、文化を背景にした言語のやり取りにおいては未だ荷が重く、AIに文脈の理解は不可能であるという超えられない壁があったのです。

しかし2022年にChatGPTという、文脈理解を乗り越えた、いや乗り越えたように見える挙動をするAIが一般公開されるという大事件がおきました。私も早速使用して会話をしたところ、明らかに今までのAI臭さが抜けた受け答えに驚愕した憶えがあります。それは同じ質問をしても、答えが微妙に変わる点なども含めて非常に人間的なのです。ただ初期のChatGPTは「口は達者だが、適当なことを言う知ったかぶりの学生」といった評がよく当てはまる感じであり、要するに平気で架空の出典やデータをでっち上げて嘘をつく「ハルシネーション（幻覚）」という現象が多く、使うにしてもかなり限定的な用途にしか使えないものでした。しかしそこから2年で急速な発展を遂げて、現在では東大試験の合格ラインを超えたそうです。実際の使用においても、ハルシネーションの問題は完全に克服できずとも、すでに分野によっては人間のアシスタントよりも有能である状況になりつつありますし、この発達速度を考慮すると推論、分析などの幅広い分野で人間を超えるのも時間の問題とされています。

この極めて人間に近いAIの能力は偏にGPUという並列演算チップの処理速度に依存しています。2023年登場のChatGPT-4.0では脳の神経組織を模したパラメーター数は数千億から数兆といわれ、まさに情報の宇宙とも呼べる膨大な計算によって漸く大卒レベルの一個の人格らしきものを模倣しているのです。これらの処理は一見するとスマートフォンやPCのみで行っているように見えますが、実は1秒100兆回の計算をする最新GPUを数万個も使った巨大な

データセンターで行われており、通信によって質問と応答のみをやりとりしているのです。現在、この超巨大になった計算モデルの無駄を省き、より小さなモデルに転移させる「蒸留」や、複雑な計算を単純化する「量子化」といった手法によって計算処理を軽減させる手法も開発されていますが、ChatGPT-4.0レベルのAIが我々のスマートフォン1台に収まるのはまだ先の話だと言われています。そしてこのレベルの知能がスマートフォン1台に収まる時、いよいよ言語的応答のみならず、家事や介護、肉体的労働の要求にも答えるロボットなどが市場に出回り、新たな知性と我々が本格的に付き合う時代が訪れるのでしょう。

ちなみに、これらの強化学習や深層学習というものを簡単に説明するならば、PCに課題を与え、PC側はその回答を人間の脳神経に模した数兆個のパラメーターに投げ、何億とおりの試し打ちをして、そのうち望ましい回答を自動で取捨選択することで自律的に生成されていく、極めて有機的なものだそうです。ですのでAIによって出された答えが実際にどのようなメカニズムでそこにたどり着いたかは余りにも複雑すぎるため検証できないもの、仏教的用語で言えば、まさに「不可得」なものだとされます。たとえば、なぜAIがハルシネーションをおこすのか、どのような仕組みによって嘘が生成されるのかについては、実はAIの制作者側でも推論はできても、そのメカニズムについては理解が及ばないそうです。そういう意味ではすでにAI内での思考の作用とは、重々帝網な華嚴經の世界、あるいは大日經疏で心は前後際不可得であると説くのを彷彿とさせるような世界があるように思えます。

AIによって引き起こされる社会問題

現在、生成AIは会話のみではなく画像や映像の作成などでも著しい発展をしています。ただ、画像や映像の生成AIは有名画家の作風を模倣したり、実在するキャラクターを使った作品をいとも簡単に生成できるため、著作権の問題が持ち上がったたり、また実際の人物の動作や音声も生成可能なため、つい最近ではロシアの工作機関がSNS上に流布したとされる、ゼレンスキー大統領の自国兵士に降伏を呼びかけるフェイク映像等、世論の誘導で使用され、非常に大きな問題となっています。

またChatGPTのような言語、推論型AIについても、悪用をされた場合の危険性が指摘されています。詐欺サイトの生成と誘導、勧誘、また個人情報の収集や盗難したパスワードの照会などで犯罪組織がすでに使用してますし、犯罪、軍事利用なども含め悪意をもった使い方をされた場合の危険性は極めて深刻なものと言われています。AIは道具です。道具であるからこそ休むことなく働き、また良心の呵責もない訳で、目的遂行のために手段を選びません。故にこのテクノロジーは核兵器などと同じように人類に対して大きな災厄をもたらす可能性が指摘されています。

さらに言えば、悪用ではなく善意でそれを使ったとしても、AIが発達することは、今までその役割を担ってきた人々の立場を極めて危うくすることにもつながります。すでにイラストや映像制作、あるいは研究職では助手の仕事が奪われる、またコンサルタント業も危ういというような懸念が持ち上がっています。AIが発達した世界で求められる人材は、AIに対して要件定義が正確にできて、的確な指示を出せる人間で、またAIの出してきた答えについて、

その真偽を見極められる人材だと言われていますが、全ての人々にその能力が求められる社会というのは、果たして良い社会なのか、とも思います。そもそもデジタル化によって単純な業務が自動化されることで、単純作業で職にありつけていた人は失業し、より高度な能力が求められるのが今の社会ですので、そこで自己の存在意義を維持できない人々の多くは心を病むことになるでしょうし、AIの登場によってその度合いに一層拍車がかかることになるでしょう。

寺院や宗団として どのように対応するべきか

このような状況に対して、私たちはどのようなスタンスで臨むべきなのでしょう。上記で挙げた人々の自己の存在意義が益々不確定になる時代にあって、人々の心の問題を如何に解決するのかは我々が担うべき重要な課題です。これは上記に書いたSNSにおける分断と憎悪の応酬についても、和解と寛容を如何に訴えるかという点とも共通します。現代社会において、満たされない、あるいは不安や憎悪を抱える人々は増え続けているように思えますし、ここの部分にこそ我々伝統的宗団は存在感を示していくべきでしょう。またテクノロジーの発達はずいぶん良い側面と悪しき側面を持ち、それを使う人の心によって福音になれば災厄にもなる点を考えれば、人々の心の中に善心を植え付け、菩提心の種を蒔く活動は益々重要になっていくように思われます。

もう一点、AIの発達によって我々自身もその存在意義を問われるであろうことも見逃せません。先日X（旧Twitter）上でChatGPTに悩みを打ち明けたところ、どんなカウンセラーよりもはっきりと自分の

心の抱える問題の所在を見通すことができた、という投稿を見かけました。これは臨床心理のみならず、我々宗教者にとっても大きな問題を突きつけています。

もちろん、血の通っていない機械との対話は価値がないと思う人も多いでしょうが、逆にへたな説法よりもAIのほうがはるかに仏教の教えを理解できた、あるいは救われたという人もこれから出現するでしょう。これらの状況に対し我々は頭ごなしに否定できるほど説得力ある論を持ち合わせているでしょうか。人法二軌を超越した大乘の教えを標榜するならば、我々自身がこの部分に執着する必要はないように思うのです。

菩提心論に「俄に遇って彼岸に達しぬれば、法、既に捨つるべし。自性なきが故に」と説く如く、我々にとっては衆生を彼岸に渡すことが重要なのであって、法はその手段でしかないのですから、AIという新たな知性をしっかりと受け止めて、良好な関係を築いていかねばならないと考えます。

必要となる教学の再構築

とはいえ、特に教学の世界ではこのAIの発達は大変であり、その存在意義の再定義を迫られる問題になりそうです。SAT大正大蔵経のデータベース化が終わり、誰でも大量の經典群から必要な情報を検索、閲覧できる世の中になり、文献学的には飛躍的に研究効率が高まりましたが、AIの発達はこの研究効率をさらに加速させるのは確実でしょう。2025年1月にOpenAIから発表されたDeep Researchは、ネット内の情報から指示された要件で情報を収集し脚注までつけた論文を自動生成します。そしてその精度は一般的なコンサルタントが廃業するレベルと騒がれるほどです。

本来、研究や論文作成というものは、多くの文献を読破し、咀嚼した後に生み出されるもので、膨大な知識の蓄積と、それを自在に引き出せる学者個人の能力が必要でしたし、論文という成果物の作成にはアナログ作業の膨大な手間が存在していました。しかしこの「情報を引き出す」という面では、AIに先んじてSATのようなデータベースの登場により手軽に実現できるようになりました。一見すると利便性の向上は計り知れないものがありますが、同時に陳腐化が始まります。

そして現在AIの登場はこの状況をさらに加速させ、推論や分析にまで自動化の範囲が広がります。研究者がAIを駆使して論文を書いたとして、その労力、手間の9割以上がAIが担う状況になった場合、確実にその出された成果物は世間的に見ると陳腐化してしまうでしょう。当然AIに投げる質問設定と要件定義というのはその分野で研鑽を積んだ研究者にしか投げられない問題であり、出力された論文の検証、ハルシネーションのチェックも含めて研究者の能力に大きく依存します。一見すると簡単そうに見えるAIを駆使した論文作成というのは、その背後に長い研鑽、研究に裏打ちされた問題意識や仮説があるからこそのもので、ただ一般世間の目はそうではないでしょう。

この問題は現在、イラストレーターなども非常に似た問題を突きつけられている状況で、「AIに描いてもらうのは楽なのだから、値段をもっと安くしろ」という要求が多くなっているそうです。手間と労力が評価基準であるならば、素人側の要求は当然そうなる訳で、このように専門性の陳腐化と買いたたきは至る所で起こり始めています。またAIに投げる質問設定、要件定義を丸々他者に利用されたら、同じような論

文（生成AIでは全く同じ文章や結論にならない点も問題を複雑にしています）が作成できる点も大いに問題です。何よりも教育という面でも学生がAIを利用することを前提とすると、学生が提出してきたものがAIに依存するのか、それとも学生自身の能力に依存するのかの判断が極めて高度なものになる点も今後大いに問題になるでしょう。

さらに上記AIの問題点として指摘されている、ハルシネーションのチェックがされていない大量の論文がネット上に溢れる可能性も見逃せません。これらを放置すると、さまざまな面で社会に誤解が広がります。文系のアカデミズムの世界ではこの問題は非常に深刻です。理系の世界であれば、実験や追試によって理論の正しさが再現できればそれがAIの出力であれなんであれ正当性を担保できます。製薬開発などではハルシネーションの問題があろうがなかろうが、完成した薬の効果こそが最も重要なはずで。しかし哲学、歴史学や宗教学ではそうはいきません。出典のでっち上げなど以ての外ですし、その意味では専門的研究機関は今以上に戯論の溢れるなか、情報の収集能力、査読能力、そして正統性の守護者としての発信能力が要求されるでしょう。

まとめ

このように現代学問として文系アカデミズムの世界ではAIによってさまざまな問題に直面するでしょうが、そもそも大師が教学を打ち立てた本意とは一体何だったのでしょうか。青年時代に儒道仏の三教から仏教を選び、その中でも最上の經典を見つけるために求法、入唐されて密教を持ち帰られた真意とは、正に真理の追求と、それ

を以て衆生に対し薬壺を開くために他なりません。そう考えた時、衆生済度のための法を打ち立てることを優先させるのならば、我々がAIを使用する時のスタンスは製薬開発のそれではなければならないはずだともあります。たとえば大師が、早魃に対しては、雨乞いの祈祷のみに執着することなく、唐より持ち帰った最新の建築技術を活かして満濃池造成に尽力された現実主義的姿勢を我々は今一度思い起こさなければなりません。その意味でも大師の遺風を受け継ぐ我々としては、AIを含めた現代科学、最新の技術というものを積極的に向き合い、適切に受容する姿勢が求められるのではないのでしょうか。

脚注

- ※1. 「SNSで多発する誹謗中傷 ゆがんだ「義憤」が社会をむしろむしばむ」 佐々木宏尚 <https://www.nippon.com/ja/in-depth/d01021/>
- ※2. 出版科学研究所 日本の出版販売額 <https://shuppankagaku.com/statistics/japan/>
- ※3. 『あの花が咲く丘で、君とまた出会えたら。』 口コミヒットの常識が変わる？ <https://branc.jp/article/2024/01/19/924.html>
- ※4. 出版社によるソーシャルメディア活用事例 <https://www.toppan-colorer.co.jp/column/3622>
- ※5. 日経新聞記事 <https://www.nikkei.com/article/DGXZQOUE212NK0R20C25A1000000/>
- ※6. 2004年 (GeForce 6800 Ultra) 2024年 (GeForce RTX 4090 Ultra)
- ※7. 日経クロステック記事 <https://xtech.nikkei.com/atcl/nxt/column/18/03084/012800001/>
- ※8. WIRED記事 <https://wired.jp/article/zelenky-deepfake-face-book-twitter-playbook/>
- ※9. 『ウィキペディアとアカデミズムの間』 山田晴通 著
- ※10. 〈インターネット〉の次に来るもの 未来を決める12の法則 ケヴィン・ケリー 著

3 「教化を考える会」ならびに「他宗派・他団体との交流会」開催報告

智山教化センター 非常勤所員 船岡芳海・長谷川理賢

はじめに

本稿では、今年度で開催された全5回の教化を考える会、全1回の他宗派・他団体との交流会について、要略を報告する。

第1回教化を考える会

開催日：令和6年5月8日

「マインドフルネスとコンパッションの心理学～自利と利他の一考察～」

講師：藤野正寛氏（NTTコミュニケーション科学基礎研究所 感覚共鳴研究グループ）

マインドフルネスは1980年頃からはストレス低減や慢性疼痛の緩和を目的として活用され、注目されるようになった瞑想実践である。1990年代には、認知行動療法と組み合わせることで、うつ病の再発予防や不安障害の低減も効果があるという研究結果が示されるようになり、2015年には、医学雑誌Lancetにマインドフルネス認知療法に関する研究論文が掲載され、うつ病の再発予防に対する医学的な有効性が実証された。これにより、マインドフルネスの研究が加速し、ストレス低減、慢性疼痛の緩和、うつ病再発予防、不安障害などへの効果が科学的に裏付けされるようになった。アメリカやイギリスでは、うつ病再発予防の主要な治療法としてマインドフルネス認知療法が推奨されるまでになっており、Googleなどの大手企業が、従業員のメンタルヘルス対策としてマインドフルネス瞑想を取り入れるなど、社会的な関心も高まった。

講師の藤野師はマインドフルネスについ

て、「次々と生じている今この瞬間の経験に、開かれた注意で“ありのままに気づいている”こと」と定義される。そのことを体験するための代表的な方法として「レーズンエクササイズ」がある。これは、一粒のレーズンを約10分かけてじっくりと味わうというもので、レーズンの見た目、触感、香り、口の中に入れたときの形や味の変化など、普段なら意識しないような細かい感覚に意識を向けることで、マインドフルネスの状態を体験できる。レーズンエクササイズをとおして、私たちは普段いかに多くのことに気づかずに過ごしているかを実感できる。たった一粒のレーズンを食べるだけでも、さまざまな感覚や自分の中で起こる感情や思考に気づくことができる。

藤野師は、マインドフルネスの最も革新的な部分は、苦しい出来事や経験に直面したときに、それまでの心理療法などでは、それらを意図的に何とかしようとするのが多かったが、マインドフルネスでは、出来事や経験を苦しいと感じている私自身を変革しようとする点にあるという。多くの人は、不変の自己が存在し、すべて思いどおりになると錯覚している。しかし、実際はそうではない。このギャップが「苦」（不満足）を生み出す。この苦はネガティブな体験だけでなく、ポジティブな体験でも生じる。この苦を解消するための有効な方法が自分の感覚を観察することをとおして自己観を変えることである。自分の感覚一つひとつに注意を向けると、感覚は生じては消えるものであり、思いどおりにならないことがわかる。この気づきをとおして、思いどおりになるという自己観が緩み、「苦」

が縮小し、不満足が減少していく。マインドフルネスによって感覚や感情にありのままに気づき、無常・無我を体験的に理解することで、自己観が変化する。この点が大事なところになってくると藤野師は述べられた。

次に藤野師はコンパッション瞑想について紹介された。コンパッションとは、苦を抱えた相手と向き合ったときに、相手の苦を和らげてあげたいと願う穏やかで温かい感情のことである。コンパッションを育むためには、心身が安定した状態で慈悲の対象をイメージし、その対象への思いやりから生じる身体感覚を味わい、その感覚を自分自身や周囲へと広げていくコンパッション瞑想が役立つという。

コンパッションは「慈悲喜捨」の4つの要素から成り立っている。

慈…生きとし生けるものの安らぎを願う心
 悲…生きとし生けるものの苦しみが和らぐことを願う心
 喜…生きとし生けるものの喜びを共に喜ぶ心
 捨…偏りのない平静な心

藤野師は純粋な慈悲喜捨を育むには、自分の内面を深く見つめ、身体感覚に注意を払う必要があるという。コンパッション瞑想をとおして、執着などの雑念に気づき、軌道修正することで、純粋な慈悲の感覚を体得できるようになる。それは他の誰でもなく、自分で感覚を見極めていくことが大事になる。

講演の最後に参加者とともにコンパッション瞑想を行ったが、その時に念じた言葉を示しておきたい。
 「私が、苦しみから解放されますように。
 私が、安らかで幸せでありますように。」

私の安らかさや幸せを、生きとし生けるものと共有できますように。

生きとし生けるものが、安らかで幸せでありますように。」

第2回教化を考える会

開催日：令和6年8月27日

「お寺の行動経済学」

講師：中島隆信 氏（慶応義塾大学教授）

講師の中島氏は、寺院の経済状況が厳しくなっている現状を踏まえ、行動経済学をもとに寺院の在り方を見つめなおす必要性を述べられた。

寺院の経済基盤は江戸時代から続く檀家制度を基盤としているが、都市部と地方では異なった理由で足元が揺らいできている。地方では複数の寺院を兼務する住職が増えており、正住ではない兼務寺では住職が不在の場合も多く、檀信徒との信頼関係の構築が難しい場合もある。また、過疎化、少子化の影響による檀家制度の衰退に伴い、宗教法人格を維持することが難しくなっている寺院も多い。文化庁や自治体もすべての寺院を把握しきれておらず、宗教法人の売却が進む可能性についても言及された。こうした事例とは反対に、週に数回、月に数回しか住職が来ることのできない寺院でも、檀家一人ひとりが自分のお寺だという意識により状況がよくなっている事例もご紹介いただいた。

都市部では檀家の減少よりも、檀家離れが問題とされており、葬儀の簡素化や明朗会計が求められるようになってきている。大手企業が葬儀サービスを提供し、僧侶を呼ばない形式も増えている。

また最近のキャッシュレス決裁が宗教活動へ与える影響について示唆された。民間業者が介入することでお布施の額が把握され、課税につながる可能性が懸念されてい

る。また布施については、「布施＝喜捨」という、捨てることの「痛み」のあとには「喜び」があるという意義を伝える重要性についても触れられた。

祈りや祈祷の行動経済学的な理由付けとして、プロスペクト理論やおとり効果が挙げられる。健康祈願や合格祈願など、祈りの動機は多様であり、内発的動機を引き出すことが重要である。祈りは単なる利益追求ではなく、行動改善を通じて社会全体をよくする利他的な行動でもある。そして科学の進歩が全てを解決するわけではなく、祈りが人間の幸福に寄与する手段として重要であると主張された。

ただし、祈願のみで経済的に維持できる寺院は少ないので、これからのお寺は、寺檀関係の再構築が重要となる。今までは檀家制度があり、先祖代々の墓があり、年忌法要があるのが当たり前だったが、少子化によってお墓を継ぐ子供もおらず、核家族化で遠方にいる場合もあるので、お墓を媒体としない寺院との付き合い方が必要になってくる。今行っている年中行事をどういった形でアピールしていくのかという課題については、住職と檀家と繋がる場所を作り、新たな信頼関係を構築していく必要がある。

信徒は内発的な動機から継続して寺院へ来てもらうことができるが、檀家はどうだろうか。葬式仏教は十王信仰がベースとなっているが、追善供養の原則のような話をしたとして、どこまで納得して現状を維持できるのか。一日葬などの葬儀の簡略化が進む中で、残された家族の追善供養を行う動機の見直しが必要である。

お寺は、単に人の集まる場所ではなく、しっかりとした宗教的な教えを基盤とした活動を行う場となるべきである。カフェや演奏会だけでなく、教えを提供できること

が重要であり、それを実践することが、僧侶の役割であると述べられた。

第3回 教化を考える会

開催日：令和6年8月30日

「現代仏教はどこに在るのか？」

講師：櫻井義秀 センター専門員

現代社会の宗教をめぐる状況は、人々の意識やライフスタイルの多様化により、伝統的な宗教観が変容してきている。かつては、「家の宗教だから」「親がやっているから」という理由で寺院などに所属する時代であったが、現在では檀信徒自身が寺院を主体的に選択する時代になっている。その要因として、かつては多世代家族であり、社会は右肩上がりの経済状況であったが、現在では夫婦世帯・単独世帯が増加し、経済も停滞し、さらに儀礼を必要としないなど、生活意識が変化してきていることがあげられる。

また継承の問題として、信仰を継承するかは個人の判断に委ねられるべきであるという信教の自由、つまり「信じない自由」という、親や教団からの信仰の強制に対して、継承者たちが自らの意思で信仰を選択する権利が尊重されるべきという考え方が広まっている。そのような中で、寺院は積極的に情報を発信し、檀信徒や地域社会とのコミュニケーションを図っていくことが重要となってくる。

講師の櫻井師は、かつては地域や文化に自然と根付いていた宗教意識は、現代では意味を説明し、納得してもらう必要がある。寺院が人々に向けてどのようなメッセージを投げかけることができるかが今後のあり方を左右してくるのではないかと提示された。

また、現代社会はさまざまな社会問題を抱えており、人々の幸福感、ウェルビーイ

ングが低下する要因となっている。幸福感を高めるにはQOL（クオリティーオブライフ：生活の質）を高めることが重要で、それを国も目標としている。ところが、生活に満足していて幸せかというと、必ずしもそうとはいえない。たとえ恵まれた環境にいても、孤独を感じていては幸福感を得られない。自分がさまざまな環境に柔軟に対応する力、そして人と繋がる力が幸福感を感じる重要な要素であると考えられる。「現在の私があるのは先祖のおかげであるか？」という質問に対して、先祖のおかげであると思っている人の方が、そう思っていない人よりも幸福感が高いという研究データがある。これは、過去から現在まで、ご先祖さまがいて私がいるという、縦のラインで繋がっていると意識することで、孤立感・孤独感を感じにくく、幸福感を高める要因になっていると考えられる。仏壇やお墓に手を合わせたり、葬儀や法事などを行うことで、自分がどういった人と関わっているのかを確認し、自分が一人ではないと感じることで、安心感や幸福感を得られると考えられている。逆をいえば、葬儀が簡略化されるほど、孤立感を感じやすくなる。また、宗教施設に通う頻度が多い人ほど幸福感が高いというデータもある。

現代社会では、林住期（65歳から80歳）をサードエイジ（第三の期間）と捉え、新たな人生のスタートとして位置づける考え方が広まっている。この時期は、退職などにより社会的な地位や活動が転換期を迎える人が多くいる。これからどう生きていくかを考えるには、そのための場所・時間・機会・素材が必要になってくる。サードエイジを迎えた人々が、仏教の教えに触れることで、人生の意味や生き方について考えるきっかけになり、自己を見つめ直し新たな生き方を見いだすことができるかもしれ

ない。そのためにも「大人の寺子屋」や「サードプレイス」と呼ばれるような大人が学べる場所を開き、仏教の教えを勉強するだけでなく、語り合い、対話する場を設け、新たな人間関係を築いていけるような活動を展開する必要がある。

第4回 教化を考える会

開催日：令和6年10月15日

「仏像をとおして考える社会」

講師：君島彩子 氏（和光大学表現学部芸術学科講師）

日本にはお仏壇のご本尊を含めると数百万体以上の仏像が存在し、家庭に仏像を持つ人も多いが、国宝に指定されている仏像はわずか130件である。しかしながら、仏像について語られるものはほとんどが後者であるため、非常に偏った話になる。仏像は信仰の対象という本来のあり方とは別に美術品としての一面がある。明治期に「美術」という概念が導入され、仏像は彫刻としての価値が認識されるようになった。美術史の分野においては、特に飛鳥時代や奈良時代の仏像が高く評価され、広く研究される傾向がある。一方、江戸時代の仏像はあまり研究されていない。これは明治に入ってから美術という概念で評価されるようになったため、近接する江戸時代の明治当初には仏像を評価するのが難しかったためである。その感覚を現代まで引きずっているのも、いまだに研究が進んでいない。

また、仏像は美術品としてだけでなく、信仰の対象としても重要であり、戦争や震災の慰霊のために建立されることもある。美術品として評価されなくても、歴史的背景や宗教的意義を具えたものは、多くの人々にとって特別な存在となる。

仏像はさまざまな大きさで作られ、現代

では「巨大仏」という言葉も生まれた。巨大仏は、特撮映画や娯楽的な要素とも関連があり、日本で最初の特撮映画も大仏が街を闊歩するという内容のものである。明治から大正にかけて、コンクリート技術の普及により、多くのコンクリート製の巨大仏が作られた。戦前は阿弥陀如来像が多かったものの、戦後は観音像が増加した。巨大仏は観光資源としてだけでなく、地域の象徴や平和のシンボルとしての役割も果たしており、たとえば、いわき市の観音像は元々シンボルとして建てられたが、後に戦没者の慰霊のための仏像として再利用された。このように、巨大仏はその時代や地域のニーズに応じて役割を変えながら存在し続けている。

また、大正大学のサロンで始められた檀信徒自らが仏像を作る「握り仏ワークショップ」という事例も紹介された。握り仏とは木端を練り込んだ粘土を使って仏像を作る活動である。参加者はまず仏像の解説を受け、次にお願いごとを書いた小さな巻物を作り、この巻物を粘土の芯にして仏像を制作する。参加者は仏像を作りながら会話を楽しみ、完成後は僧侶が読経を行い、参加者全員で手を合わせる。このワークショップは、被災地や支援施設でも実施され、大船渡の仮設住宅では、参加者は亡くなった家族の特徴を仏像に反映させるなど、個々の思いを込めて制作した。参加者は仏像作りを通じて仏教への興味を深め、癒しやセラピーの効果を感ずることができたという。特に、震災で家族を失った人々にとっては、仏像が心の支えとなっていたようである。この活動は宗教性と造形性を兼ね備え、幅広い年齢層や障害を持つ人々も参加しやすい。仏像を作ることで、参加者は自分自身の願いを形にし、手を合わせることで信仰の対象としての仏像の価値を

再確認することができる。

仏像は関係する人々によってその価値が決まる。最初に仏像を作りたいと願う人々、仏像の製作者、宗教者、手を合わせる人々が関わることで、仏像はその価値を保ち続けている。

第5回 教化を考える会

開催日：令和7年2月26日

「寺院における住職と家族のこれから」

講師：丹羽宣子氏（立教大学コミュニティ福祉学部コミュニティ政策学科助教）

ジェンダー研究の視点から社会・文化の多様性について考察することは、現代社会における重要な課題である。2000年代初頭、ジェンダー研究は主に女性の問題に焦点を当てていた。女性が直面する社会的・文化的な課題を解明し、女性の視点から社会を再評価することが主な目的であった。しかし、2009年以降、ジェンダー研究の対象は大きく広がり、男性の生きづらさや男性特有の問題にも関心が向けられるようになった。これにより、ジェンダー研究はより包括的な視点を持つようになり、社会・文化の多様性をより深く理解するための重要な手段となっている。

社会学は、広範な学問分野であり、社会の「当たり前」を問い直すことを目的としている。ジェンダー研究は、社会における男性と女性の役割や期待を分析し、これらがどのように形成され、維持されているかを探求する。たとえば、歴史的に見ても、ジェンダーに基づく役割や期待は時代や社会によって変化してきた。色の象徴（ピンクは女の子、青は男の子）も文化的・歴史的背景に基づいており、これらの象徴がどのようにして現在の形になったのかを理解することは、ジェンダー研究の一環である。

現代社会では、男性と女性という二元論

的な性別観が見直され、多様な性別認識が受け入れられつつある。ジェンダー研究は、こうした多様性を理解し、社会の中での役割や期待がどのように変わっていくかを分析する。またさらには、家族の形態についても、時代とともに変化している。1975年から2015年までの家族構成の変化を見てみると、単独世帯が増加し、核家族の割合が相対的に減少していることがわかる。特に、単独世帯の増加が顕著であるが、これは一人暮らしをする人々が増えたことを示している。

一方で、三世帯同居家族の実数は20世紀末までほぼ横ばいで推移していたが、21世紀に入ってから減少傾向にある。このような家族構成の変化は、高度経済成長期における都市化や産業構造の変化と密接に関連している。かつては長男が地元に残り、家業を継ぐことが一般的だったが、都市部への移住が進むにつれて、三世帯同居家族の維持が難しくなった。また、戦後の高度経済成長期には、専業主婦が一般化したが、現代は多様な家族形態が見られるようになっている。ジェンダー研究の視点から見ると、社会は常に変化し続けており、その変化を理解し、適応することが求められる。ジェンダー研究は、そのための重要なツールであり、社会の多様性を尊重し、促進するための基盤となる。

寺院も家族の多様性を認め、その変化にどう対応するかが重要となる。たとえば、浄土真宗本願寺派では、女性住職の配偶者も堂守として認められるようになり、家族の多様性を反映した制度改革が行われている。また、日蓮宗の調査では、女性僧侶の割合が増加しており、娘が寺院を継ぐケースも増えている。これは、仏教界全体で女性の役割が拡大しつつあることを示唆する。しかし、ジェンダー問題には依然と

して課題が残っている。女性住職の割合が低く、特に伝統的な意識が強く残る地域では、女性がリーダーシップを発揮することが難しいといった状況もある。

総じて、寺院と家族、仏教界のジェンダー問題は、歴史的な変化と現代の課題が交錯する複雑な状況にある。家族の多様性を理解し、受け入れることは、現代社会において重要な課題であり、ジェンダー研究や社会学の視点からも重要なテーマとなっている。今後はさらなる制度改革と社会的な変革が求められている。

第1回 他宗派・他団体との交流会

開催日：令和6年12月23日

「直面する布教・教化に関する課題への取り組みについて意見交換会」

講師：今岡達夫 師（浄土宗総合研究所所長）、他数名

「他宗派・他団体との交流会」は、本宗以外のさまざまな宗教団体や研究機関と、情報交換や意見交換をすることで、他の宗教団体がどのような考えをもって活動しているのかを学び、本宗の今後の教化活動をどのように進めていくべきか考えるヒントを得ることを目的としている。以下、浄土宗総合研究所との意見交換会について報告する。

現代社会は、情報過多、価値観の多様性、少子高齢化などさまざまな問題を抱えている。そのような諸問題に対して仏教の視点から、そして浄土宗が現代社会において果たすべき役割を考え研究し、時代や社会に対応するべく設立されたのが「浄土宗総合研究所」である。それまで別組織であった、教学院研究所・布教研究所・法式研究所を統合した形で設立された。

研究領域の大きな柱として、「基礎研究」「応用研究」「総合研究」の3つに分けられる。

「基礎研究」 教学・法式・布教の基礎的な研究を行い、浄土宗の教えの根幹をなす経典や教義に関するものの研究を行うとともに、研究員の育成にも携わっている。

「応用研究」 基礎研究を踏まえ、現代社会における問題に対して浄土宗の教えがどのように応用できるかを研究している。たとえば、典籍の現代語訳はもちろんのこと、外国語訳や、外国語に対応した教化資料の作成など、典籍の読める化、わかる化を研究している。

「総合研究」 現代社会が抱える諸問題についての現代的解釈や解決策、対応策などを研究している。たとえば次世代継承に関する研究やAIについて、宗教と科学・福祉とどう連携していくかなど、多角的な視点からの研究を行っている。

これらの研究には多くの研究員が在籍しているが、その中でも研究スタッフを選任する方法が特徴的である。研究スタッフは、主任がピックアップし、それぞれの研究に参加させることができるという。それは、浄土宗関係者だけではなく、他宗派の研究者、または医師など僧籍を持たずともその研究に参加できるというものだ。その根底には、社会的なテーマについては宗派や僧籍を問わず問題は共通しているという考え方がある。そして、他宗派や異業種の方と交流することで、宗内関係者だけではたどりつかない新たな知見を得られるというものである。

当日は、今岡所長をはじめ関係者の皆さまからお話を伺い、浄土宗の現代の諸問題に対する研究姿勢の真剣さが垣間見えた。また、質問にも丁寧にお答えいただき、大変有意義な交流会となった。

IV その他

1. 購入図書

【一般図書】

書籍名	編集者名	発行所
『空海論/仏教論』	清水高志	以文社
宗教と政治の戦後史 統一教会・日本会議・創価学会の研究	櫻井義秀	朝日新聞出版
仏教の未来年表	鵜飼秀徳	PHP研究所

書名	
月刊住職	文化時報

2. 宗贈図書・資料 宗内寺院・教会刊行物

【宗内寺院・教会定期刊行物】

刊行物	寄贈者名	備考	刊行物	寄贈者名	備考
岩槻大師	彌勒密寺	埼玉第四教区 寺籍1番	千の手	寂光院	東海教区 寺籍35番
お大師さまと ともに	大本山 川崎大師平間寺	神奈川教区 寺籍1番	高尾山報	大本山 高尾山薬王院	東京多摩教区 寺籍1番
川崎大師だより	大本山 川崎大師平間寺	神奈川教区 寺籍1番	高幡山報	別格本山 高幡山金剛寺	東京多摩教区 寺籍2番
桔梗通信	興性寺	岩手教区 寺籍31番	智光	大本山 成田山新勝寺	下総印旛教区 寺籍1番
くすのかおり	東漸寺	九州教区 寺籍21番	成田山法光	成田山大阪別院 明王院	京阪教区 寺籍39番
虚空	東覺寺	東京東部教区 寺籍28番	微咲	岩手教区 布教師会	岩手教区

【宗内寺院・教会刊行物(含、宗内寺院関係寄贈分)】

刊行物	発行所	寄贈者名
揭示傳道の手引 上之巻、中之巻、下之巻	東京多摩教区布教師会	東京多摩教区布教師会
真言宗智山派宮城教区寺院名鑑	宮城教区智山青年会	宮城教区智山青年会
佛教文化論集 第十三輯	川崎大師教学研究所	川崎大師平間寺
ホトケ・ディクショナリー 仏教慣用語事典	大正大学出版物	大正大学

【関係機関・団体定期刊行物】

刊行物	寄贈者名	刊行物	寄贈者名
アンジャリ	親鸞仏教センター	ちくまん	大本山大覚寺
池上	池上本門寺	花園	妙心寺派 教化センター
おかげさま	妙心寺派 教化センター	へんじょう	総本山善通寺
正法輪	妙心寺派 教化センター	法華コモンズ通信	法華コモンズ 仏教学林

【他宗派刊行物】

刊行物	発行所	寄贈者名
近現代『教行信証』研究 検証プロジェクト研究紀要 第7号、第8号	親鸞仏教センター	親鸞仏教センター
仁和伝法所所報 第4号	総本山仁和寺 仁和伝法所	総本山仁和寺 仁和伝法所
子どもたちに伝えたい戦争のはなし	全国青少年教化協議会	全国青少年教化協議会
密教の話 曼荼羅の世界	佼成出版社	佼成出版社
葬儀・法事をどう説くか	臨済宗妙心寺派 教化センター	臨済宗妙心寺派 宗務本所教化センター
現代と親鸞 第50号	親鸞仏教センター	親鸞仏教センター

【関係機関・団体定期刊行物】

刊行物	寄贈者名	刊行物	寄贈者名
全仏	全日本仏教会	りす倶楽部	りす倶楽部事務局
びっばら	全国青少年教化協議会		

【大学・関係機関・関係者】

刊行物	発行所	寄贈者名
御室版両部曼荼羅集 初版本 附編 配置図・尊名一覧・索引	金沢大学アジア図像集成研 究会	金沢大学アジア図像集成研 究会
宗教法制研究所紀要 紀要第65号 法と宗教をめぐる現代的諸問題(十六)	愛知学院大学宗教法制研 究所	愛知学院大学宗教法制研 究所
密教文化研究所紀要 第37号	高野山大学密教文化研究所	高野山大学密教文化研究所

智山教化センターの役割と活動

智山教化センターは、真言宗智山派教化規程第二条「本宗の教化活動を効果あらしめるために、智山教化センターを設置する」の規定に基づき、真言宗智山派の教化を推進し、実動させるサポート機関です。

主な活動としては、

- ①教化推進施策として真言宗智山派が掲げる「教化目標（わたしたちの目標）」の策定。
- ②真言宗智山派で主催するさまざまな研修会の企画・立案と運営協力。また、教区で主催する「教区教化研究会」「檀信徒教化推進会議」などの開催協力。
- ③教師・寺庭婦人を対象とした教化情報誌の企画・編集。檀信徒に真言宗智山派の教えや「教化目標（わたしたちの目標）」などを知っていただくための教化誌の企画・編集。
- ④宗教文化全般、宗内寺院や他宗派の教化活動に関する情報収集や調査研究。
などを行っています。

智山教化センター構成員（令和6年4月～令和7年3月）

役職名	氏 名	就任年月日	所属寺院・団体
センター長 所 員	高 岡 邦 祐	R6.3.28	埼玉第五 寶性院
	倉 松 隆 嗣	H21.4.1	栃木南部 観照院
	上 村 正 健	H27.4.1	埼玉第一 実正寺
	伊 藤 尚 徳 ^{※1}	H27.4.1	安房第一 極楽寺
	中 嶋 亮 順	H29.4.1	埼玉第十二 正法寺中
非常勤所員	池 田 裕 憲	H31.4.1	安房第二 圓光寺
	島 玄 隆	H29.6.1	東京多摩 金剛寺中
	平 野 隆 光	R4.4.1	上総第一 華藏院
	原 徹 汰	R5.4.1	東京南部 遍照密院
	船 岡 芳 海	R6.4.1	新潟第三 慈眼寺中
専 門 員	長 谷 川 理 賢	R6.4.1	栃木中央 泉福寺中
	高 橋 一 晃	H31.4.1	埼玉第一 東養寺
	河 北 秀 真	R6.4.1	埼玉第六 延命寺
	平 川 真 海	R3.4.1	埼玉第八 観音寺中
	吉 田 住 心	H24.9.1	埼玉第九 地藏院
	小 杉 秀 文	H31.4.1	上総第四 勝覺寺
	伊 藤 堯 仙	R5.8.1	下総匝瑳 東福寺中
	川 又 俊 則	H31.4.1	鈴鹿大学
主 事 主 事 補 佐	櫻 井 義 秀	R6.4.1	北海道大学
	萩 原 輝 浩	H27.4.1	埼玉第七 大光院
書 記	陶 山 泰 憲	R6.4.1	埼玉第二 三光院中
	保 田 研 心	R3.4.1	上総第四 蓮福寺中
雇 員	山 口 璃 恵	R5.4.1	埼玉第六 總願寺中
	石 川 照 恵	R5.4.1	埼玉第六 萬福寺中

※1 令和7年1月より非常勤所員に変更

年 報 第28号

（令和6年度号）

令和7年6月1日 発行

発行人 真言宗智山派宗務総長 三神栄法

編 集 智山教化センター

発行所 〒605-0951

京都市東山区東大路通り七条下ル東瓦町964

総本山智積院内 真言宗智山派宗務庁

電 話 075-541-5361(代表)

FAX 075-541-5364

印刷所 株式会社ディー・エイ・ティ・コーポレーション